

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和十年十一月廿日印刷納本 昭和十年十二月一日發行

淨土

二十二月號



第一卷 第八號

法然上人の信仰生活

中村辨康 著 四一六頁 定價 三十錢 (送料 二錢)

法然上人の辿り給ひし信仰の道こそわれらがしるべなり！

信仰を求め宗教に憧れるのは人間本來の姿である。古來宗教界の巨人と仰がれる聖者は悉くこの人間の本當の姿を最も輝かしく明瞭に現はした人間の精神の鏡であり、また萬人の中に潜む信仰心の萌芽に開花の時を與へた慈雨でもある。故に若しそれ等巨人生活の内部を覗ふことが出来るなら、我々は日常無意識に捨てゝ省みなかつた生活の瓦礫の中に、突如燦然として輝く向上の珠玉を見出し、貪しく思はれた己れの生活が豊富な内容に充たされてゐるのを再發見して驚嘆するのは當然である。

法然上人の巨大にして無双な求道生活、信仰生活の迹を慕ひ、その法悦にひたらんとするも時に現代生活の汚濁を洗ひ清め清淨なる人間本來の姿に立返らんがために外ならぬ。

著者の言葉——精魂をつか

つらしめて求めに求めた三十

年の求道生活とその當時のあ

らゆる階級の人達を魅し盡し

た四十年の信仰生活とが何ん

なに近代人の胸を突くかを振

りかへて見たいと思ふ。

法然上人

大正大 大野法道著 四六判 拾五錢 (送料 二錢)

法然上人に關する文獻は古來少しとしなかつたが、いづれも難解に過ぎるか、浩瀚に失するかして、萬人に適する文字を得なかつた恨みがある。篤學の著者が研磨してものしたるこの簡潔にして要を得たる一本は讀者をして直接上人に接するの思ひあらしめ、その嫺々たる餘韻は讀む者を法悦の彼方にひき込まずにはおかぬ！

◆ 法然上人鑽仰會 發行所 ◆

佐藤春夫著 小杉放庵畫並に裝訂

掬水譚

法然上人別傳

大學ノート版
豪華裝訂
三二〇頁
定價三圓

現文壇の巨匠であり、信行とともに淨土門の歸依者たる著者にして始めてものし得る法然上人の大繪卷！

今夏以來、東日、大毎紙上に連載して各方面の絶讃を博し、それによつて法然上人鑽仰の聲はいやが上に高まつた近來の名著である。在家數百萬の信仰人はもとより、教界文壇、學界の注目の的となつた模範的な傳記小説である。

今、こゝに、豪華なる單行本として顯はれて、本書の價值は一層燦然として輝き出す！ 加ふるに肉筆そのまゝのコロタイプ印刷による小杉放庵畫伯の挿畫、本書の内容とびつたり一致した同畫伯の手になる美事な裝訂、この書こそ凡ての家庭、致るところに、信仰の光をもたらしにふさわしいものである。

(直接本會に申込まれた向には著者の肉筆署名入のものをお送りする豫定)

賣捌元 大東出版社



◇ 浄土 第一卷 第八號 十二月號 目次 ◇

・表紙

井上正春

・扉

青柳喜兵衛

信仰講話

度胸の話

真野正順 (二)

三來夜話

佛にまかせよ

増上寺法主 大島徹水 (三)

隨筆 騷音裡に坐して

相馬御風 (六)

信仰體驗談

叔父さんの信心	元橋君雄 (一)
聖意に抱かれて	村田江楓 (四)
本當に生きる力	片山初代 (五)

信仰相談

(六)

短歌

山柿の家

與謝野晶子 (七)

川柳 雪さまざま

代田重雄 (八)



傳奇小説

賤の襖着た男

吉田初太郎(三)

趣味の話

いけばなの面白味

中村道邦(六)

街の美談

細民街の世話役

井原文雄(八)

繪の旅一畑薬師

小野佐世男(七)

投稿募集

(五)

名士に聞く

如何したら家中が明るくなるか

跡見李子

(六)

隨筆

海人漁人が苦屋

吉水辨道(五)

英傑人物

心の置きどころ

水上三吉(四)

小説

旅路の芭蕉

宇野浩二(四)

阿彌陀經講義

極樂淨土とは何んな處か

中村辨康(七)

編輯 順風滿帆 後記

(三五)

(二〇)

國寶

右京權大夫隆信筆

原本知恩院所藏

法然上人御影

堅壹尺四寸・横八寸
絹本寫眞セロス版
精巧典雅數十度刷

申込み殺到!!
殘部僅少

本會は創立以來、夙に法然上人の御眞影頒布の急務なることを痛感し、京都知恩院所藏にして畏くも後白河法皇の勅旨により、藤原隆信朝臣の筆になつた相好端嚴、筆致精巧を極めたる國寶「法然上人御影」の複製企劃を進めてゐたが、時恰も淨土宗青年會聯盟でも期せずしてこの議が起り、茲に一致協力してこれが作成に着手し、種々苦心の結果、此の程漸く完成を見るに至つたので、本會は早速全國の支部に配布したところ、果然！一般會員よりの申込み殺到のため、更に偉大なる上人の御眞影を普く同志とともに拜すべく、特にこれが實費頒布を斷行することにした。

精巧無比！神々しき上人の御影は實に眞に迫るものがあり、常に上人の人格を景仰し、念佛生活を體味到せんとする同志は、此の際至急お購めの上、朝夕座右に掲げて恭敬せられんことを敢て奨む。

一葉實費 金 壹 圓 (送料不用)

申込所

法然上人鑽仰會

東京市芝區芝公園明照會館内

振替東京八貳壹八七番
電話芝(43) 一三五二・〇八四〇

淨土十二月號

煩惱のこきうすきをかへりみず

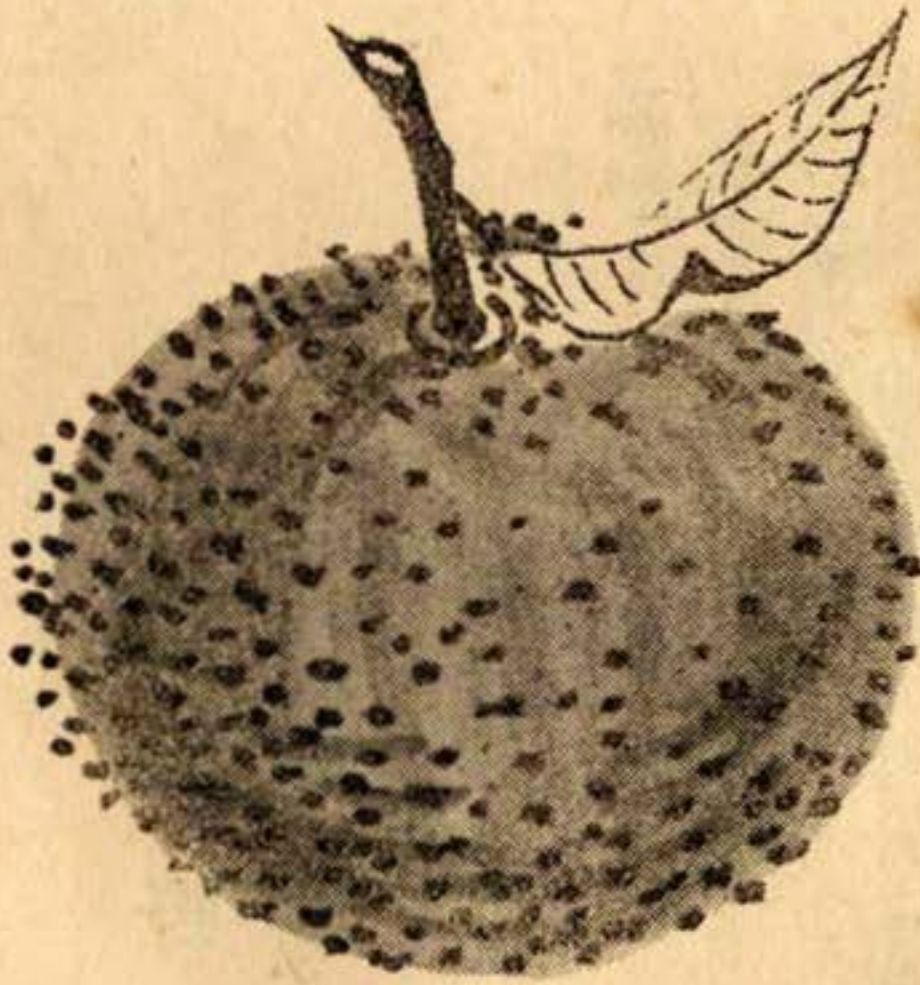
罪障のかろきおもきをも沙汰せず

たゞ口に南無阿彌陀佛と

となへむこゑにつきて

決定往生のおもひをなすべし

(法然上人)



淨土十二月號



度胸どきょうの話はなし

眞野正順

(一)

「度胸」は、東洋の華です。

萬難せまり来る危急の眞只中に立ちながら自若として自己を失はぬ男子。一家の危急を目前にしながら、肅然として取亂すことのない女性。この萬難の中に来て自己を失はぬ「度胸」は東洋の誇であり、また華であります。

—— おどろいて押し留める乾分等の手を振拂つて、一人河風に裾をひるがへしながら、笑つて仇敵水野の邸に死に、行つたあの幡隨院長兵衛の底知れぬ度胸は、何時までも「男の中の男」として謳はしめてやまないのです。

また平素、虫一つ觸れるのさへも怖ぢてゐる心優しい日本の妻が、一旦戰場から傳へてくる夫の戦死の報知を前にしては、たちまち毅然として眉一つ亂さず、一家の運命をその優肩に擔つて立つ「雄々しき美しさ」は、この東海の大和撫子の誇としてやまぬところでは。

「度胸」は、氣高くかつ剛い。それは何物をもつてしても壓へて壓へきれぬ毅さと共に、さながら青竹を割つてゆくやうな爽快さとをもつてゐる。

度胸は、東洋日本の華です。

(二)

それならば、この「萬難の中に自己を失はぬ度胸」はどうして得ることが出来るのであらうか。

この時、このやうに考へる人がある。

「萬難の中に自己を失はぬ者とは、つまり、それだけ自己を押通してゆくことの出来る者だ。だから自分の力を信ずる自信の強いものほど度胸がある」

とさうして見ると、自力をたのむことが並外れて強いといふことは、とりも直さず、それだけ自分以外のものゝ力を軽く見ることに外ならないから、結局、臆面なしの、ぶう／＼しい者ほど、

度胸がある、といふことになる。

——實際、世間には、こんな風に度胸を考へてゐる人が少くない。殊にそれが西洋風の考へ方に滲てゐる人達に多い。

そんな人は、度胸を養つて人生の勇者となるには、自信を臆面なく強くするに限るといふので、他人を人とも思はず、自分の都合の悪いことは一刻も速く忘れる事にして、矢鱈に自信ばかり強くして、肩で風を切る

つまり、自分の「我」さへ強く張つてゐれば、度胸はついてくると思ふ。

(三)

ところが、こんな人からは、決して本當の度胸は出てこないのです。

こんな話を聞いたことがある。

「戰場は妙なものだ。いざ戦となつて、砲弾は、空に、耳を聳くやうに轟き、彈丸は氣味の悪いウナリを立て、雨のやうに身をかすめ、傍でバタ／＼倒れてゆくやうになると、いままで内地では肩を張つて、いかにも強そらだつた男が、眞先に、蒼白になつて倒へだす。さうして、平常は、かへつて、女のやうに柔順し

かつた兵士が、毅然として剛くなる……」

自分の力をたのむことの出来る間は、まだ度胸の有無は問題になつて来ない。自分の力で押し通せる見込が、少しでも、残つてゐる間は、いくら強がつても、それは度胸ではない。さうでなくて、自分の力是用ひつくされ、今はもう、どうともならず、危難迫り来つて、必死滅亡の境にまで追ひつめられて来たときに、はじめて、その人の度胸の有無が出てくるのです。

あの俠客が、群がる敵の白刃の下に、たゞ一人、素裸の身を従容として投げ出した時は、もはや、自分の方では、敵を防ぐ力はことごとく絶えてゐるのです。敵の白刃、一たび動けば、その素裸の身はすぐ殺されてしまふのです。その、はつきりと死ぬにきまつた時に、従容として死を恐れないもの、それが度胸であり、男の華です。

(四)

度胸は決して、自分の力をたのむことではない。さうでなくて度胸とは、自己の滅亡を恐れざる必死滅亡の中に、従容として身を投げこんでゆくことに依て、そこで一轉、より氣高く剛い生によみがへつて來ることである。つまり「死んで生きる」道なのである。

あの幡隨院が、水野の邸に乘込んでゆくのに、もし、幾人かの強さうな子分に圍まれて行つたのなら、それは度胸ではあるまい自分に頼むところを残してゐるからだ。

自分に頼むところを持ち、それに取組つてゐる者は、いくらドタン場まで頑張つても、それは度胸ではない。それは、「未練」といふ。

「未練」はかならず「卑怯」になる。力にたのむからだ。邸の中に大勢の仲間を集めて、長兵衛を待つてゐた水野は、一人ぼつちの敵を、更に浴室に導いて素裸にさせ、そこで、槍襖をつくつて殺しにかゝる、といふことになる。

度胸は「我」を未練がましく張ることでは、斷じてない。

あへて従容として「死」の中に突入することに依て、自分は死に切る。——その死に切つたところに、一轉、水の進るが如く今迄になかつた颯爽たる生命はよみがへり、何者も抵抗すべからざる、莊嚴なる「死力」が現はれて、敵をとり挫ぐのである。

この眞意は、たゞ人生を、その生きる方面ばかり考へて「自己の保存と擴充」ばかりに夢中になつてゐる西洋の人生觀では、理解することは困難である。

彼等には、この「散つて死ぬ」なぞといふ事は、無鐵砲きはま

る、一時の興奮のために前後の思慮を喪つたものの、としか思はれぬであらう。だから、明治以來、西洋風の考へ方に深く滲みこんでしまつた現代人には、莊嚴な生の飛躍は、理解できず、近づき難いものになつて來てゐる。

(五)

「度胸」のかげには、久しい間の東洋の深い人生の諦觀がひそんでゐる。東洋人は、人生を深くかつ嚴肅に凝視することにおいて他の何れにも優れた民族である。

西洋は、自己をたゞ、その「生」において見る。東洋は、自己を「生」においてと共に、また「死」において見る。人は「生きる」ものであると共に、またかならず「死する」ものであるからである。

生命を「生」においてのみ見るのは、淺い一面觀である。生命はその「生」と共にまたその「死」において見られねばならぬ。さうでなければ、それは、本當に全體を見るものとはならない。

「死」の上に、わが刻々の生命を凝視める。それが、眞に、深く謬たざる東洋の人生觀の特長である。

深く自己を凝視するならば、人は五十年の後に來つて、はじめ

て死するのではない。現在刻々に、死にかつ生れ更つてゐるのである。

「成長」は、たゞ、古いものゝ崩壊によつてのみ生じ、新らたなる飛躍は、常に、舊き立場の排棄によつてのみ現れる。

兒童は、年々、育ちゆくために、その舊い衣服を脱ぎ捨てねばならぬ。さうでなければ、却て、成長は障げられるのである。

その衣服は、昨年は確かに、兒童の生命のために必要であつた然し、本年は、それを着てゐることが、却て生長を障げる。

そのやうに、人は、眞に自己を生かさんが爲に、しば／＼この自己を殺さねばならぬ。「自己」の思ひは眞實生命の外殼であるからである。

人は自己を保存せんとして、却て、自己を殺し、深く自己を殺すことに依て、却てよく生きる。果敢なき五十年の姿にたよる心は、むしろ眞實の生命の流を腐らせる妄念である。かゝる影の如き自己にたよる妄念を拭ひ去つて、刻下に「死んで生きる」道それが眞實生命の道である。

生命は刻々と新たに溢れてやまぬ。たゞ小さき「我」の妄念にとゞまるが故に、流は停滯せしめられて腐敗する。眞實に生きるためには「我」の殻は絶えず脱ぎ捨てられて、澄める眞實の生命のみ澄みかつ溢れねばならぬ。

「死中に活を求める」といふ、度胸の道の眞義はこれである。

(六)

然しながら、かく思ひつゝも「絶えず死にゆく」ことは實は難しい事なのである。この「我」をあげて殺し切つてしまふのでなければ、眞實の生に飛躍する事は出来ぬと知りながらも猶、離れがたきは「我」の未練であり、殺しがたきは本能の迷ひである——いざ「我」を殺さんと思ふとき、人は誰でも、云ひ知れぬ淋しさが心にわき、過去の形骸に頼らうとする未練がわく。

それならば、どうしたら「絶えず死にゆく覺悟」が養はれるであらうか。こゝにこそ、古來東洋の宗教の重點がおかれてゐる。人は、小さきこの「我」において生きてゐる限り、自ら進んでこれを殺すことなぞ出来るものでない。たとひ如何ほど莊嚴なる度胸の道の尊さを知つてゐたとしても、それは理屈の上だけである。自分の中心が、この小さき「我」にへばりついて生きてゐる限り、それを捨て、大道に出ることは出来ない。

自分のたよる「我」を殺してしまへば、あとは頼り處なく、淋しくてたまらぬからである。

深く、この小我を殺し得る者は、その以前に、この我よりも大いなる眞實生命をしつかと握つてゐる者のみである。より大いなる

るものを持てばこそ、小さな我は深く捨てられるのである。

それだから言はれる。「度胸はたゞ信念ある者にのみ現れる」と。我を超えたる大いなる生命において生くる「信念ある者」にして、はじめて、よく自己に死して、莊嚴なる生に甦り來ることが出来るのである。

(六)

私の兄は軍人であるが、こんな話を聴かされた事がある。「戦争に行つた時、隊にとても強い兵士がゐた。其男は金澤の出身で、平素は女のやうに柔なしかつたが、いざ彈丸の下に立つと急に恐ろしく強くなつて少しも死を怖れない。」

どうしてさうなのかと思つてゐると、或時斬壕戰の眞最中、その男は何かブツ／＼云ひ續けに云つては彈を撃つてゐるのに氣がついた。よく聴くと「お念佛」なのだ。「南無阿彌陀佛」と云つては引金をひき、また「ナムアミダブツ」と云つては彈をこめる。戦ひの一刻々々、其の男は、佛に身を任せ切つて死んだ氣になつてゐる。その安心して、死を怖れぬ心が、あの女のやうな男を、おどろくべき勇敢な戰士にしてしまつたのだ』

大いなる佛の生命の中に生きる宗教の中にこそ、はじめて、眞實の生命の道は現はれ、また本當の「度胸」は生れてくるのです。

一畑藥師



旅の繪

一畑藥師

小野佐世男

雨にぬれつぶれし石段をのぼり行く。
 雨雲が尻の方からわいてくる。
 もう、こんなのにのぼりしか、
 疲れた腰をたたく。
 一望千里、雲又雲、
 僕は今、雲上の人である。
 耳近く和讃の聲をきく、
 もう、頂上ならん。
 このけはしい山坂、
 年老へる盲人、
 杖にすがり、雨にうたれ行く。
 一畑藥師如來は特に眼病に
 靈驗あらたかなりと聴く。
 おゝ、今！雲走り去り、
 慈光の如き太陽の光
 こゝ藥師堂に降りそゞり。

(繪並に文)

街
の
美
談

細民街の世話役

—— 信仰に燃ゆる熱血兒 ——

井 原 文 雄

青 柳 喜 兵 衛 畫

この一篇は決して單なる物語ではない。生きた實例であり、信仰に活きるものゝ尊い告白である。主人公吉田健作君は、現に東京の北隅にある細民街に薬局を持ち、哀れな人々のために、精神的に物質的に、仁慈の情けを施してゐる生きた人物である。此の物語は、はじめ主人公の實名で發表して頂くつもりであつたが、信仰をもつ者の謙遜な態度から、それがどうしても許されぬため特に、その希望を容れてこれを物語風に書いてみた。勿論、か

うした事情から出場の人物は敢て匿名を用ひてあるが、しか事實は些かの修飾もないことを附記して、この美談を大方の讀者に送る。

法螺貝

風光の明眉をもつて知られてゐる世界の大公園、波靜かな瀬戸の内海。

爽かな光りをうけた朝霧の中から、波間に点在する島々が、夢のやうにぼつかりと浮び出て見えるさま、眞帆や片帆がその島々の間をすべるやうに縫つてゆく有様、さすがに世

界の公園として耻かしからぬ大自然の美しき情景である。見るもの聞くもの、すべてが純朴であり、平和そのものである。

この美しき内海に面する、讃岐寄りの海岸に、今しも、ブー、ブー、と鳴り響く法螺貝の音が、あたりの静けさを破つて、渚一體に時ならぬさんざめきを惹き起してゐる。—— 出船の合圖だ。野良にゐるもの、家の中で仕事をしてゐるもの、男も女も、老人も子供も皆んな手ん手に魚籃と細綱一本とを持つて、その法螺貝の音をたよりに馳けつけるの



である。皆んなが持つて集つた細網が一束にされる。そして、その中の顔きゝが、それで籤をつくり、各々一本づゝ抽きとりその日の地引き網に参加する者が、その籤によつてきまるのである。

海岸に近いこの地方の人々は、この網船の出ることを大變樂しみにして待つてゐる。

一群の魚が、海岸近く押し寄せて来るのを見て、網屋の親仁は、時をのがさず、この地引き網の船を出す。この出船の合圖が法螺貝によつて、村の人達に傳へられる。村人は取るものも取り敢ず大急ぎで海岸に集つて来る。とかく生活物資の豊でない農村の人達は、この漁によつて分け與えられた魚が、楽しい夕餉の膳にのせうる唯一の御馳

走なのだ。しかも、食膳に魚をはこぶ方法としては、この勞力の奉仕によつてうるのが一番手輕だし、時によつては分け與えられた魚を賣り歩いたり、物々交換をしたりすることもある。この土地の人々は、この法螺貝の音を聞き漏す者は、殆んどないと云ふ有様だと云ふから、都會の生活に馴れてゐる人達には、一寸この空氣が判り兼ねるだらう。兎に角、その日／＼の副食物さへ意の如くならぬ、この土地の人にとつて、この法螺貝の音は、見逃すことの出来ないものだ。網は、今しも海岸近く引きあげられやうとしてゐる。はち切れるやうな元氣で、この網を手繰りつゞけてゐる人達の後姿を、一人ぼつねんと淋しさうに見まもつてゐる少年、それは健作であつた。

健作の家は、嘗ては村の顔役でもあり、相當な資産を持つ豪農であつたが、今では誰一人顧る人さへない、哀れなその日暮しの境遇におかれてゐた。

破産

彼の祖父は吉田安右衛門と云つて、性來のお人好しで誰彼となく温情をふりまき、村の誰から大變信用せられて、ずつと村會議員をつとめたり、時には村長にまでなつたことのある裕福な暮しをしてゐたが、とある奸策に陥ちたため、その資産、田も山も畑までも、全部人手に渡さねばならなくなつた。

悲境に落ちた安右衛門は、今や没落してゆく吉田家のことを思ふと、立つても坐つても居れなかつた。親代々、この土地に榮えて來た吉田家、それが今、自分の代になつて、その財産をすつかり手放してしまはねばならな

いとは、何と云ふ不運なことであらう。
「あゝ、俺は何と云ふ馬鹿者だらう。何と云ふ不幸者だらう。……申しわけない。ご先祖さまに、申しわけない。……」

一切の公職からはなれ、前途に希望を失つた安右衛門は、暗夜に目かくしされたやうに、全く途方に暮れて了つた。たとひ、村のため、

地方發展のためと思つて乗つた相談ではあつたにしても、それが安右衛門の性格を見ぬいた上で、彼の信望を失墜せしめやうとする、謂はゞ政治的勢力争ひの奸策であり、しかも其の結果がこんなにまで吉田家を破産に導いたかと思ふと、どう考へても諦めがつかなくなつた。

ありし日の我が山々を眺め、我が田畑を思ひ、そして己が先祖を、我が昨日までの生活を考へては、日夜悶々として、半ば狂亂に近い氣持にさそはれゆく自分を、どうすることも出来なかつた。

『畜生ッ！』

恐ろしい考がふと彼の腦裡を掠めた。自暴自棄になつた彼には、今更如何なる人の言葉も耳に入らなかつた。温情味豊かなりし性格は、今や彼のどこからも見出すことが出来なかつた。

けたまふし銃聲が一發、靜に眠る夜の寂寞を破つた。事なきに馴れた村人は、この不意の恐ろしい物音に夢破られ、恐怖に戰きながら、
『何處だらう？』

『どうやら、吉田の家らしいぜ』
村人は流血の慘事を頭に描き乍ら、大急ぎで吉田の家の方へ走つた。途方に暮れてゐた安右衛門の噂は、この銃聲に血の香を思はせずにはおかなかつた。

『たうとう、やつたか！』

たゞかひ續けた人生も遂に奸策に陥ち、名譽も地位も財産も、皆んな剝ぎとられてしまつた安右衛門の最後だ。世間から受ける冷嘲な嘲笑を身の後に感じながら、惱み苦しめられた魂は、自ら求めて永遠の死の世界に還つた。己が無知を嘲り、人を呪ひ、世を呪いながら……

これが少年健作の九ツの時の出来ごとであつた。

ズドーン！

それから餘り日も経たない或る夜、突如、

「健坊のお祖父さん、自殺した。やあい、みんな！今日から健坊とは遊ばないんだゾ。遊んちやいけないだ。家のお父ちゃん、さう云つたよ。あんな子と一緒に遊ぶと馬鹿になるつて……」

「やあい、健坊、泣いてらあ。」

今までは村長さんの孫で、村の子供達から一緒に仲よく遊んで貰つてゐた健作も、我が家が零落し、自殺した祖父をもつてみると、子供達までが誰一人相手にして呉れるものがなかつた。小學二年生、頭はない子供心の健作、何が淋しいと云つても、友達から仲間はずしになつたくらゐ悲しかつたことはない。

殊にこの地方では、たとひ、それがどんな理由であらうとも、親譲りの財産を無くしたり、自ら求めて生命を縮めたりすることは、非常な罪惡として、それらの人々とは世間並の交際をしないことになつてゐた。それが此の地方人の、かたくな、純朴さをあらはしてゐる一美點でもあらう。だが、吉田安右衛門の場合、多少同情の眼が向けられたとしても、



それは故人に對する村人の御恩返しにこそなるのだが、とにかく、如何なる理由に拘らず、破産とか自殺を極度に氣嫌してゐる人々は、此の事件があつてからと云ふものは、異口同音に彼等一家を除け者扱ひにし、すべての交際仲間からは外れ者にされ、一步家を外に出ると、『彼家のお祖父は……』と後指をさされ、冷い罵聲をあびせかけられるのであつた。

一事が萬事この調子であつたら、この地方の人達にはなくてはならない此の「地引き網」の仲間に入れて貰へないのも當然であつた。だから、健作の家の人々は、魚の食べられない日が幾月も續いた。健作はこの「地引き網」の舟の出る度に、かうした淋しい氣持で、一人ぼつねんと村人達の姿を恨めしさうに眺めるのであつた。

だからその迫害が如何に強いものであつたか、その當時の健作の幼な心に映つた氣持は、どんな言葉をもつてしても言ひ盡せないものがあつた。まして、自分の罪ならざる責をまともに受けてゐた健作の父親、幸吉の心は、どんなに辛かつたことだらうか……

今は人手に渡つた田畑、それが嘗は我が家のものであつたことを考へると、やつとの願ひで、少しばかりの小作でもさして貰へるやうなつたことは、健作一家がせめてその日の

お米にありつけたことではあつたにしても、實に感慨無量なるものがあつたに違ひない。

健作はその少年時代のことを思ひ出し、眼に一抹の涙をたゝえて、かう語つた。

『私は今でもはつきりと覚えてゐます、――』

私の父が山嵐の風になぶられながら、鉄を杖に身體をぐつたりさして、田の畔にしよんぼりと、何事か考へながら佇んでゐた、あの哀れなすがたを……

父は一生かゝつても、あの田を、あの山を、そしてあれだけの畑を全部とりかえすつもりであつたらしいのです。朝は暗いうちから起き出して、夜は星の閃きを見るまで、文字通り粉骨碎身、更生の一路を邁進しつゞけました。母も兄も、そして次男坊であつた私も……だが、巨額に上るそれらの田畑がどうして一朝一夕の努力で取り返すことが出来ませう。……』

離別

忘れもしない、健作が十五の年の秋、もう

收穫もすんで寂しい晩秋の風が身に浸む頃。

『健や、お前、坊さんになるの嫌ひかい？』

健作の父幸吉が、突然かう云つた。

『いやだよ、お父さん。僕は坊さんなんか大嫌ひだ。』

『それでもお前は、勉強したい、學校へ行きたいと云つてゐたぢやないか。お父さんは、お前が坊さんの所へ行きさへすれば、ちやんと勉強の出来るやうなところを見つけて來たんだよ。』

『……』

『お前、行つてくれないか。家はこんなに苦しいんだし、とてもお前を上うへの學校になんかやることは出来ないんだよ。それにお前一人ゐなければ、家の暮しだつて少しはらくになるだらうし……』

健や、どうだい。お前、一ッお寺へ行つてくれないか、さうすりやあ、助かるんだがなア。』

幸吉は拜まんばかりに、健作にその寺へ行くやうにすゝめた。實際、健作はお寺へ行く

のは嫌ひだつた。だが、勉強さして貰へると云ふ一縷の望みが手傳つて、健作はやつと頷いた。そしてとにかく、その晩のうちに、少年健作を弟子に欲しいと云ふ、お坊さんの所へ連れられて行つた。

それは、隣り町のある大きなお寺で、つい四五日前から説教に來てゐたお坊さんであつた。健作はおどろしなから、廣いお座敷の隅つこの方にたゞ黙つてうつむいてゐた。父の幸吉は、そのお寺の住職と一緒に、説教に來てゐるお坊さんの所へ行つて、長い間、話しこんでゐた。

――その翌日の午後、小さな風呂敷包一つさげ、そのお坊さんのお供をして汽車に乗つた少年、それは健作であつた。

我が子を手離す父と母の、さみしさうな姿が段々小さくなつてゆく。母は泣いてゐるのであらう。前かけを顔にあて、のびあがりのびあがりながら、その汽車の後を見送つてゐた。

健作の眼にも白いものがにじみ出てゐた。

堪えやうとすればする程、こみあげてくる
泪。

『あゝ、僕はもうお父さんやお母さんの側に
居られなくなつたのだ。』

前の座席にすわつて居た和尚さんの姿がぼ
いづとしか見えなかつた。

師の心に泣く

その翌年、春まだ浅い三月、健作の希望は
やつと達せられた。京都の市に近い、とある
町の中學に入學させて貰へることになつたの
だ。胸のあたりに光る金釧、健作は夢ではな
いかと、有頂天になつて喜んだ。

そして、五年間の星霜は瞬く間に過ぎ去つ
た。二十の、年の暮、健作の師匠、森井隆善
師は彼を一室に呼び寄せて、その老眼をうる
ませながら、健作に向つてかう云た。

『早いものだなあ。お前がこの寺へ來てもう
五年。來年の者はいよく中學も卒業だ。』

どうだ、お前、やつぱり坊さんになるの嫌
ひかい。お前を貰ふとき、お前のお父さんか

ら頼まれたことがあるんだがな。——是非私
の子にして貰ひたいとな……。

だが、お前はもう子供ではない。先々の目
的も考へてゐるだらう。強ひてすゝめるわけ
ではないが、お前が僧侶として立派に身を立
てるつもりなら、専門學校へも今迄通り、こ
の寺から通はしてやる。しかし、どうしても
嫌ならお前のすきなやうにするがいい。上の
學校に進むなり、お前の實家へ歸るなり、そ
れはお前の自由だ。

お前も長い年月、この俺の所で修行したの
だから、もう大丈夫だと思つてゐる、だが、
たとひ是から先、どんなことがあらうとも、
この五年間、寺で修行したと云ふ氣持を忘れ
てはいけない。社會に出てどんなことがあら
うと、此の氣持だけは保ちつゞけてほしい。
これがお前に對する唯一つの願ひだ。

まア、來年の春、學校を卒へるまで、ゆつ
くりと考へて見なさい。』

師匠、森井隆善師の此の言葉を聞いてゐた
健作は、たゞ其の言葉のありがたさに、その

場に泣き伏した。——なんと云ふ有難い言葉
だらう。世の中にこんな慈悲深い方もあるも
のだらうか。故郷の人々とこの師匠、それら
を思ひ合せながら、彼は今更のやうに新しい
世界を見出したやうな氣持になつた。

それからと云ふものは、彼は毎晩師匠の寐
んでゐる部屋に向つて、心から掌を合はせず
には居られなくなつた。底知れぬ人の慈愛に
感激したのだつた。今日までの五年間、教へ
てもらつたお經やお念佛、それも今までは少
しも有難いと思つたことがなかつたのに、師
匠の此のたつた一言の温い言葉に、心から
感じた彼は、げに佛を念ずる人の心はこんな
にも慈悲深いものであらうかと云ふことが、
やつと解つたやうな氣がした。——それから
の彼が、今までになく眞剣に念佛を申して見
る氣になつたのは言ふまでもない。

笑を貰ふて

へ螢の光り、窓の雪……
明くれば二十一歳の春、健作は感激に満ち

たこの歌とともに、中學五年間の業を果し、恩ある師匠の許を辭して、一路東京へと向つた。

藥學専門學校の試験も無事に合格した。

苦學の志を立て、上京した健作、浮世の風も吹いて來ないやうな、刺激の少ない一寒村に育つて、温い師の恩情に育まれて來た彼が、一步外の世界に飛び出したのだから、その苦みは考へたわけでも、随分辛かつたに違ひない。

文化の中心、東京の空で前後三年にわたる人生修行の旅こそ、眞に彼の魂を鍛え、彼の人生に對する認識を一層深からしめたものであつた。

師の温いを懷を離れ、彼の目的を達しやうとして出て來た東京。普通の人でさへ生活に苦しむ所で、苦學しようとしたのだから、それが人一倍、忍耐力のあるものでなければ、なしとげ得ない難行であつたことは事實想像するにかたくない。

新聞配達、牛乳配達、筆耕業、家庭教師、

藥局助手等、種々の職業を轉變しながら、彼はひたむきに勉強した。彼はその當時のことをかう云つてゐる。

『懷中に一錢も有たぬ日が幾日かつゝいたでせう。何度そんな苦しい思をしたか分りません。全く淋しいものでした、金のない時の氣持はネ……』

たつた三年、云つて見ればわずかなものですが、その間には乞食もしました。時には、私の姿を見て非常に同情して下さつた方もありました。だが、やつぱり私は苦學する方が適してゐたやうです。叶はぬ時には、敢然と人の軒に立つて物乞ひしたこともありました。

いや、實際亂暴なことを考へたこともありましたが。——なあと、他人の家の田地さへ横取り

山も田も、そして畑までも取りあげられて昔の榮華は夢と化し、生きる力さへ失はんとしてゐた一家から、遂に健作は藥劑師としての榮冠を得、今や貧しきものゝ、よき相談相手となつて、貧民街の父と親まれてゐる。

品 藥



する世の中だ、わし一人に飯位食はして呉れたつて罰は當らない、とね、ハ、、、、」

血氣の若者、自由な一人身、熱し易い彼の魂に身を投げかけた異性もあつたであらう。非常に同情して呉れた人もあつたであらう。だが、このことについては今多く語る自由をもたないし、又こゝには餘り必要なことでもない。

彼は更に言葉をつづける。

「勿論、こんな状態ですから、充分な學資が得られやう筈はなく、随分無理な勉強もしたやうに思ひます。身體は勞働に疲れ、満足な榮養も摂れないため、蒼白く瘦せ衰へたこともありましたが、私の精神生活は決して暗いものではありませんでした。あの日以来、私は一日として念佛することを忘れたことがありません。藥專時代、時には「彼奴少し氣が變だぞ。」などと云はれたこともありましたが、

今では、かうしてさゝやかな藥局までもつことが出来るやうになりましたが、これとても、全く師匠森井隆善師のお蔭です。

私はあの寺院生活を機縁として、今本當に

生きる悦びを味はつてゐます。これも偏に私を温い手で導いて下さつた師匠の賜です。この御恩は一生忘れることが出来ません。私は師匠によつて久遠の光りに目覺めさせられたのです。今でも毎夜／＼西の方に向つて拜みます。田舎の方も、あれから徐々に更生の道をつづけてゐます。父はその後、私が卒業の榮冠を目前に控えた時、私の心を知るや知らずや、私に遭ひたいとも言はず逝くなりました。哀れな父よ、哀れな祖父よ、私は必ずあの奸知にたけた冷酷な人々のためにこそ、却つて今、このやうに仁慈の藥を盛つてあげることが出来るのだ、と思ふと、矢張り、あの人たちに與へて貰つた逆縁なればこそと思ひます。決して其の人たちのことを憎めません。」

あゝ、これが彼の口から出る言葉だらうか。苦しめられ、虐まれた人々に對して、それを却つて恩だと思つてゐる彼の前には、自然と頭が下らざるを得なかつた。今の彼こ

そ、眞に信仰の極に達してゐるものだ。

巷に佛教を説く

苦行三年、彼はやつと藥劑師の免許をとつた。しかも、彼が開業するに當つて選んだ場所がふるつてゐる。都の北隅、人も知る貧民窟の眞直中に彼の店は開かれた。そも／＼、人の一生の運命を決するとまで云はれる晴の開店に、選んでも選んでわざ／＼此の邊鄙の地を求めたと云ふことが、先づ人々を驚かした。「狂人染みたことを云ふな」これが彼の郷里にある實兄の言葉であつた。

狂人！實にや、彼のひと爲り、彼の信仰、彼の信念、それ等を十分に知る人に非ずんばこの彼のやり方を狂人視するのも當然であらう。

「實兄にも、わしの心が解つて貰へぬのかと思つたとき、私は實際淋しかつた。だが、私の師匠が遂に私を援けてくれました。嬉しかつたです。私はその時も再び師の恩に泣かさ

れました。

私がわざ／＼こうした場所の悪い所へ開業した氣持は、たゞ御推察願ふより外ありません。

今でこそ社會人一般が宗教に關心を持つて來てゐるやうですが、然しまだ／＼駄目です。無關心な程度ならまだしも、全然反感さへもつてゐる人があるんですからね。私の周圍にも澤山ゐますよ、さうした人がね……。環境がよくない勢もありませうが、實に氣の毒だと思はれてならない人が多勢ゐます。

「お坊さんのお説教なんてつまらないぢやないか。一體なにが救はれると云ふんだらう。救はれるものなら救つて貰はうぢやないか。その日の飯さへ食へない日がある俺達にはそんな「ありがたや」の振りまはす文句より、一膳の米の飯の方がよつぽど有難いんだ。」

かう云ふ彼等の言葉も一應尤もなことだと思ひます。たゞ、彼等は食ふことのみしか知つてゐないのです。

「考へても見ねえ、そんなものをありがたが

るより、泡盛（琉球のお酒）のきつい奴でもきゆつと一べい吞めるくれえの仕事の方が、どれだけ有難いか。それに、此の頃は不景氣でさ、五日に一べんの仕事だつてありやしねえんだぜ。實際、可愛相なものだよ。

ねえ、藥屋の大將、俺達のやうなカード階級になつちや宗教なんてもなあ、いらねえんだ。神も佛もありやしない。救ふも救はれるもあつたものぢやない。家ぢや餓鬼が腹をすかしてヒイ／＼泣くし、娼は娼で日經ちが悪くて、乳は出ないし、ミルクの一杯も買つてやる錢アなし、ほんとに世の中ア嫌だなあ。えッ、宗教と云ふものはパンは興えんが、パンの味を教えるッ？。

冗、冗談ぢやねえ、食ふパンがないのに味がわかるかつてんですよ。

あゝ、だから嫌だよ、まあ、そんな話は盡（金持）の所へでも行つた時にしておやりよ。あの人達ア閑だから、そのパンの味なんて話ア喜ぶぜ。さうすりやア、大將の商賣だつて繁昌するぜ。」

隣人愛

「私はかうしたなげやりの言葉聞くと、自分のことのやうに情なく思ひます。そして、ミルクの一罐もぼんと恵んでやります。私の生活だつて樂ではないのです。人に物を恵んでやる程、豊かな暮しでもないのです。」

人に物を恵んで、あの嬉しさうな顔みたさにやるのでもないのです。今月は問屋への支拂に困るがなア……と思つても、彼等の身上を考へると、恵んでやらずに居れなくなるのです。自分の過去の姿を思ひ出すと、やむにやまれぬ氣持になるのです。そのくせ、後では困るのですが……。』

かう云つて、彼の少年健作、今の吉田藥局主は筆者に苦笑して見せた。

そして又、更に感慨深さうな顔をして語つた。

「私は此處（細民街）の人々に、私のこの信念を伝えたいと努力してゐますが、だが、彼等はなか／＼耳を傾けません。彼等は宗教と

は遙に縁遠い人達です。でも、不思議なことに、私の所では、貸し倒れがありません。これこそ、實に不思議だと思つてゐるのです。が、彼等は困る中から、少しづつでも入金してくれまゝ。家賃なんか、幾月も拂はないやうな人達までが、催促もしないのに薬代を持つて来て呉れるのです。そのお金だつて、彼等にして見れば血の出るやうな大切お金です。私は、いつも、無理しないやうに、都合のよい時拂つて下さい、と云つてゐるのですが、そこは變に義理固いところがあつて、一たん持つて来た金は決して持つて歸りません。そんな人達が他の店の拂ひは踏み倒しても平氣である云ふのですから、その義理固さも實際變なものだとは思ふんですがね。いや、細民と云つても同じやうに人の子ですもの、温いところと冷いところとの區別はつきまゝです。』

筆者は此の話を聴きながら、人の世の裏表、人情の機微、殊に彼等細民の心理と云ふものについて、大いに考へさせられた。

『私は死ぬるまで此處に踏み滞まつてゐるつ

もりです。彼等を少しでも宗教的に導きたいと思つてゐます。彼等に正しい生活を……さうです。私は貧しい人達と手を握り、受けるだけの難に耐えてゆきたい。忍苦の試練を受けた者が進むべき途、私に與へられた途、それはたゞ、あの人達のよき相談相手となつてあげることだけです。口で説くよりも、却つてその方が眞剣です。あの人たちも喜んで呉れます。夫婦喧嘩の中裁、酔っぱらいの面倒、これで随分忙しいのです。これも矢張り佛縁です。師匠への御恩返しです。寺でやらなければならなかつた身が、巷に乗り出して

明恵上人と松茸の戒

樽尾の明恵上人は松茸が大へん好きであつた。或時物持ちの信者が上人を招いて松茸をいろいろに料理して御馳走したことがあつた。信者は上人の御満足氣な様子によろこんで、『上人様がお好きと聞きましたので諸所を奔走して松茸をとゝのへたのでございしました。幸ひお口に適つて仕合せに存じました。』と申し述べると、上人はふ

やつてゐるだけです。』

こゝまで語りつゞけると、彼はほつとしたやうに目をつむつた。目がしらから、白いものが滲んでゐる。萬感胸に迫る、感激の泪であらう。

細民の目、街の救世主。彼は今、あらゆる苦難と闘ひながら、貧しき哀れな人達に心からなる救ひの手を差し伸べてゐる。しかも、それが自分に與へられた任務だとさへ心得てゐる、その心の美しさ、人に接するこの信念、誰かこの前に頭を下げに居られやうか。

(おはり)

つと吐息なされて、

『ほんたうに佛を信ずる者は、他人からあの人は佛法を好んでゐるなどと云はれることさへ恥づかしい氣がいたします。まして松茸好きなどと云はれるのは淺間しいことです。松茸をたべるからこそいろいろ御迷惑をかけたのです。何とも申しわけありません。』

さうしてその後、上人はふつつり松茸を食さぬやうになつた。

筆 隨

騷音裡に坐して

相馬御風

十一月に入つて間もない九日からすさまじい暴風と、眞冬かと思はれるやうな寒さが襲つて來た。まだ見頃に早いと思つてゐた木々の黄葉紅葉が、あまりにむごたらしく吹きちぎられて行く。まだこれから咲くべき蕾を幾つも持つてゐた庭の山茶花は、今にもぶつ倒されさうに風に揉まれてゐる。

雷鳴に伴つて大粒な霰が時々屋根をぶち破るかと思はれるほど物凄い音を立て、降つて來る。隣家の二階に間借してゐる勤め人夫婦は、永い間丹精して來た幾百とも知れないほど澤山の蕾を持つた懸崖の小菊の鉢を窓先の庇に出して楽しんでゐた。その鉢植の菊が今朝見ると、根元からぽきんと折れてみじめな様子で軒先にぶら下つてゐる。

暴浪の地響が絶え間なしに家をゆすぶつてゐる。浪はすでに防波堤の上までぶち上げて、濱の畑の作物は鹽水を被つてゐるといふことである。町中の川へ乗り込んで來る浪は、街路一面に潮泡を吹雪のやうに浴びせてゐる。その中を人々は風吹鳥のやうな格好で、黒いマントにくるまつて歩いてゐる。

空は一面に眞黒な雪に蔽はれ、海の方からはしまき雲が時々唸りを立て、吹き上げて來る。そしてそれが大粒な霰となつて大地を襲ふ。

山々はいふまでもなく一昨日も、昨日も、今日も雪であらう。山奥の村々も既に時ならぬ初雪に見舞はれてゐることであらう。

「今からこんなにならうとは思はなかつた。今年は一體



どうしたといふんだらう。」

かう人々は嘆聲を取交はしてゐる。

私はかうした自然の騒音裡に、一人でぢつとして二階の書齋にすくたまつてゐる。油断してゐてまだ炬燵を出さなかつたので、机に向ひながらも傍の火鉢にしがみつくやうにしてゐる時の方が多い。そして

「全くこれちややり切れない。」

時々半無識にさういつた同じ嘆聲を一人で洩らすのである。

そんなやうにしてゐるところへ、今し方菩提寺から十四日にお十夜法要を営むからといふ案内狀がやつて來た。

「さうだ、もうお十夜の季節になつたのだ。道理で……」と私は心の中で肯いた。

それは幼い頃から祖母や両親が、「お十夜の荒れ」とか「お妙講の荒れ」とかいふ言葉を使つてゐたのを聞いてゐたことをおもひ出したからであつた。

私ばかりでなく、多くの人々は今年に限つてあまりに早く冬らしい荒れのやつて來たことに驚いてゐるが、實はそれは今年ばかりでなく例年のことなのであつた。

さう思へば、玄關脇と裏庭の隅の八つ手の樹が、あのさびしい眞白な花を寒さにもめげず咲かせてゐるのであつた。

「もう八つ手の花があんなになつてゐるんだもの。」と今更の如く心に肯く。

毎年八つ手の花の咲きはじめる頃には、必ずかうした荒れと寒さが一度はやつて來るのだ。それを逆にいふと毎年かうした暴風浪と嚴寒の思ひがけなくやつて來る頃には必ず八つ手の花が咲くのであつた。

私達はそのことはよく知つてゐる筈であるにも拘らず毎年同じやうにそのあまりに突然なのに驚くのであつた。

これは私達があまり自然にあまえ過ぎて、つひうかうかとしてゐるからに外ならない。

自然はさう無暗と突拍子な運行を演じない。

それを自然の出鱈目な變動のやうに思つたり、又自然のさうした氣紛れを怨んだりするのは、つまりは私達があまり自然にあまえ過ぎたり、又あまり自分勝手に考へ過ぎたりしてゐるからに外ならない。

そこへ行くと昔の人は忠實に自然の運行に隨順してゐ



たやうである。昔の人には大切に壁に貼られた曆は、決して日曜表や祭日を見る爲のみのものではなかつた。

随つて昔の人は實によく曆を見てゐた。今の人は七曜を知る爲以外あまり多く曆を見ない。いひかへれば今の人にはあまり科學的文化にたより過ぎて、とかく自然の運行表であるところの曆を熟視することを怠つてゐる。

曆の面に表れた所謂「いりもの」即ち「つち」とか「八せん」とかいつたやうなことにしても現代人は無關心の人が多い。そこへ行くと毎日の天候に最も多く關心を持つものは、海に働く人々であり、季節の推移について最敏感なものは野に働く人々である。

それらの人々こそ本當によく曆を見る人々であり、云ひかへれば自然の運行に随順してゐる人々である。

私は今自分が時ならぬ天候の變動であると思つてゐたここ二三日の暴風浪と嚴寒は、實は昔から「お十夜の荒れ」といはれたり「お妙講荒れ」といはれたりして來たあり勝ちの自然現象であつたことに氣づいて、却て自分の迂闊をあらはれんでゐる。

平凡生活のその日その日を常に新たな心を以て味ひ得る者の幸福を一方に貴びながらも、昔から云ひ傳へられ

てゐる自然の運行についての警戒を忘れて、昔から有り勝ちなこの季節の變動に驚きあはてゝゐる自分達の迂闊さを、私は今更の如く反省させられつゝある。

こんなひどい暴風浪や嚴寒が今年に限つてこんなに早くやつて來たと驚いてゐるのも間違つてゐるし、又今からこんなでは此冬はどんなことになるだらうといふ今更らしい不安に襲はれてゐるのも大間違ひである。なぜかといふと、私達は自分達の過去の永い經驗を顧みても今からのこんな天候をそのまゝ冬に入つたやうなことは嘗て無かつたからである。

多くの年に於て十一月中旬から下旬へかけてのかうした一時的の自然の變動は、云はゞ冬の先進部隊の奇襲のやうなもので、この後又しばらく静かな初冬の快さを惠んで貰ふのが常である。

そしてそのしばらくの安靜期間が過ぎると今度は本當に冬に入るのである。だからいはい昨日今日のこの冬らしさは、人間に對する自然の豫告的警戒のやうなものである。そしてつゞいて來る初冬の安靜さのうちに人々をして眞冬に對する準備をととのへさせ、その完了を待つて本當の冬がやつて來るといふやうな仕掛けに出來て



ゐるのだと見れば見られるのである。

私は今暴風と大浪と嚴寒とすさまじい雷鳴や降霰の騒音裡に孤坐して、靜かにさうしたことを考へつゝそれを更に人間一生の推移轉變の上に照合して、自然と人生との無量の意味を味はせて貰つてゐるのである。

いたづらに驚いたり、焦つたりせず、私は常に自然と人生の推移に對する用意をして行かなければならぬ。

畫人月僊の奮起

徳川中期の畫家圓山派の開祖圓山應舉

門下十哲の一人に數へられた僧月僊は、

畫人としての譽は高かつたが、平素吝嗇

の上に大變高い畫料を食るので、人物と

しての評判がわるかつた。或時、京都の

一名妓から、『お禮はいかほどでも差上

げますゆゑ、是非共畫いて頂きたる存じ

それが自然隨順の心であると思ふ。

すなほに受け入れつゝ、しかも常に靜に用意を怠らな
い、それは極めて平凡なことのやうであるが、常に新ら
しく持ち直さなければならぬ心がけであると思ふ。
私は今つく／＼その事を考へてゐるのである。

(二〇・一一・一二)

ます。そしてお出来なすつたら御足勞で

も御持參願ひます。』と頼みに來られたの

で、月僊は好き標鳥御參なれとばかり、

描き上げた畫を持參して頼み人を訪れ

た。するとその名妓は畫料の外に過分の

謝禮をしたうへ、『ともかくも一獻……』

と月僊を御馳走の席へ招待した。見ると

衆人稠座の席上、かの名妓はつと立上つ

て、『皆さん、今日私は月僊師の名畫を手

に入れましたが、畫は上手でも人間が汚

いから、とても床の間へは掛けられませ

ん。御覽下さい、私は腰巻にいたしましたし

た。』かうすらすら云ひのけて、くるりと

裾をまくると、無残にも名畫は腰に巻か

れてゐた。月僊は黙つて席を退いた。翻

然と悟つた月僊は、貯へてゐた巨萬の富

を貧者に散じて、以後は専ら風光を友と

し、畫筆に親しんで遂に後世に名を残し

たのである。

x

x

x





三來夜話



増上寺法主

大 島 徹 水

佛にまかせよ

信仰第一義

私が京都の家政女學校に赴任した當時は一般教育界に於て、宗教教育といふものについて何らの關心も注がれてゐなかつたのである。寧ろ學校教育そのものが宗教と名づけられうる一切のものを排斥してゐたと云つた方が當つてゐる。もともと家政女學校は普通一般の女學校とは異り、單に學問だけではなく、生徒に敬ひの心を起させ、佛様に掌を合す教育に眼目を置いて創立されたのであり、またその創立に當つて一切の事に盡力された坂根氏の敬虔な信仰態

度にはまことに頭の下る思ひがするのであつたが、兎に角世間の風潮にはなかなか打ち克つことが出来ず、創立當時から月一回の法話もたゞ通り一べんの形式に流れてゐたのにすぎなかつた。それで私も法話の間を有効にしたいと種々考慮もし、努力もしたのであつたが、やはり期待するやうな結果は見えて來ない。校長の私が一所懸命でも、他の教員の方々が歩調を揃へないといつた工合で、當時は随分骨折損を繰返したものであつた。

確か大正二年の二月頃だつたと思ふ。或若い教員が急病で亡くなれたことがあつ

た。早速その教員の宅に生徒代表を伴うて弔問に訪れると、出て來た教員の父親が、「何しろ急病でしたのでその苦しみやうは傍で見てもられませんでした。あれもまだ自分が死ぬとは思つてゐなかつたでせうしあんなに悶え苦しんだのでは後に残された私も心のこりがしてなりません。それはそれは何とも申しやうがありません。」かう私に涙ながらの訴へをした。——その教員の追悼會を學校で行つた際、私はその席上で信仰問題の所感を述べて、教員始め生徒一同に人生に於ける信仰第一義を説いたのであつた。それから約三月ほどして

からであらう。

心を明るく持て

その年私の學校を卒業したばかりの中京の三中西某といふ指折りの商家の娘さんが重病で臥つてゐるとの知らせをうけた。ところがその知らせを私のところにもたせられた病人の友達が云ふには、「三中西さんは友達の見舞に行つても面會を拒んで病室に通してくれません。」とのことだつた。それで私がその事情を詳しくきいてみると、病人は自分の家が商業上の取引で失敗し、破産に瀕してゐるので、つい娘心からさういふ家庭の状態を耻ぢて友にも遇ふことを避けてゐるのだと分つた。さう分つてみれば捨てても置けず、私はすぐに三中西家に電話をかけ、そして見舞に出かけて行つた。そしてお母さんの附添うてゐる病室で私は娘さんに、

「お友達には會つたはうがよろしい。家の

ことは災難であつて、あなたが氣を揉んでゐてもしかたがない。あなたは靜かにお念佛を稱へて心を明るくもち、お友達の親切な心をうけとりなさい。」

かう慰めを云ふと娘さんは大きく首肯いて、「先生ありがたうございました。」とよろこんでくれた。

それから友達を訪れると、病人は心をひらいて迎へるやうになつた。今までのことを詫びてよろこぶ風であつた。彼女達は絶えず私のところへ病人の状態を傳へに來てくれてゐたが、私もまた「必ず毎日二、三名づつで見舞ふやうに。」と彼女達に云ひつけて置いた。ところが私が行つてから十日ほど経つた或朝見舞に行つた二人が泣きながら私のもとに駆けこんで來た。

生死は佛にまかせよ

「先生！ 昨晩行きましたらお暇乞ひをされました。浅子（病人の名）さんが申しま

すのに、私は明日ゆきます、心が晴れて往生いたします、どうぞ校長先生によろしくお傳へ願ひます、かういふわけでございますから先生のお出でをお願いいたします。」

私はすぐ行つた。病室に入つてみると、成程病人は安らかな顔をしてゐたが、間もなくこの世を去つて行く様子が一目で知れるのであつた。私の氣配を感じると、病人はしづかな笑みを浮べて、

「先生、ゆくとときの心得を……」

と、低い心が心を突くやうな聲で云つた。「自分から死ぬことを決心しないでよろしい。生死のことは、本人が氣にかけんない。自分のことは佛にまかせてゐなさい。……それからお母さんは病人のそばにゐ、兄弟の方々は次の間に控へて靜かに落ちついて念佛を申し、病人の念佛を助けなさい。」

私はかういふやうに種々注意の言葉を與へて、暫く念佛を申してゐたが、

「私はこれから知恩院に行かなければならぬ用がありますので、向ふに行きつくまでの間の電車の中で、あなたのために心からお念佛を稱へつづけてゐますから安心して下さい。」

と病人に云ひ置いて、私は三中西家に別れを告げた。その晩、私は所用で名古屋へ赴かねばならなくなつたので、夕方、支度の都合からいつたん學校に立寄ると、小使が病人の死を私に傳へたのだつた。

笑顔で迎へる

そのまゝ三中西家に取つて返すと、ちやうど玄關のところで、亡き娘さんの弟が二人、にこにこしながら私を迎へて立つてゐた。私が、死者を出した家の者達の笑顔を不思議に思つてゐると、二人は互に顔を合せて元氣な聲を出した。

「先生！ 先生のお話から、姉さんがほんとに立派な往生をいたしましたので、悲し

みよりそのことが嬉しくて皆が喜んで念佛を申して居ります。」

奥へ案内されると、靜かに安臥してゐる娘さんの手は合掌したまま、床のうへに垂れてゐる。その死顔のやすらかさ、美しさ！ 枕經をすませた私に、お母さんはほつとしたやうにしみじみ語るのであつた。

「先生がおかへりなさいましてから、浅子は兄弟一人々々に會つておわかれをいたしました。『自分は死んでもきつと家を守るゆゑ、あなた達は親を大切に、正直に働いて下さいね』それから不斷救儘で困る末の

弟はよほど氣になると見え、『ほんとに親の云ひつけを守つて、いゝ子になるんですよ』と繰返し申して居りました。『さあ、これでもう云ひのこしはありませんから、一緒に緒にお念佛をとなへませう』さうしてみな

でお念佛いたしました。私がうろたへて佛壇のお燈明の灯を消してしまつたのを見て、浅子は『母さん、あわてないでお念佛

して下さい』などと、それは平生とちつとも違はぬ心のもち方で注意したりいたしました。あの子はほんたうに合掌のまま佛さまに抱かれて往つたのでございます……」

* * * *

浅子さんの追悼會が學校の講堂で行はれた席上、私は先きの若い教員の死とこの信仰人の死との相違について心からの訓話をした。

現在、私の學校が世間の學校と少しでもちがつた誇りをもつてゐるとすれば、それは教員も生徒も皆同じやうに合掌の生を歩むといふことなのであるが、——その誇りはこの浅子さんの死がのこして行つたものであると云つても過言でないと私は信ずる。

(をはり)

順風滿帆

本會の發展ぶり

「淨土」も毎號好評だ。大毎、東日連載の佐藤春夫氏「掬水譚」も完結した。次は明春の演劇上演に一路躍進だ。

會員の増加も、噂の擴がるのと同じ速度で増加してゆく。東京、大阪、朝鮮、京都愛知、滋賀の順位であるが、今日の一位二位明日は必ずしも安心出来ない。朝鮮京城の小林源光氏、熊本の橋本正禪師、山口の石井榮助氏のやうに一人で百人も新會員を獲得して下さる方があるから、教線大異常をきたすかも知れない。

現在では支部は全國に三百を算してゐる。支部が幾つか寄り合つて、聯合支部の出來た所も多數に達してゐる。先づ聯合支部大會の第一聲は「法然鑽仰」紙上で再三報導した通り、去る十月二十日夜大阪聯合支部で擧げられた。大阪の篤信の人々の御

盡力によつて、一千五百名の會衆を集め、國民講堂で盛大な聯合大會大講演會が催された。東京からは矢吹慶輝博士、佐藤春夫氏の兩講師が御多用の中を特に大法宣揚の爲、欣然參加して下さつたのは、鑽仰會なればこそである。無論中村辨康、眞野正順の兩理事も參加した。當日の鑽仰講演會の講師問題は次の通り

現代文化と淨土教の立場

眞野正順氏

法然上人の女性觀

佐藤春夫氏

日本佛教の一大分水嶺

矢吹慶輝氏

出張した中村、眞野兩氏は休息の暇もなく、翌十月二十一日午後には奈良三和山極樂寺に於いて開かれた奈良聯合支部大會に馳せつけて、奈良聯合支部多數の會員と力を合せて、豫期以上の好結果を收めた。

續いて翌二十二日午後は京都佛教專門學校の支部講演會に飛んで、眞野、中村兩氏が講演した。その夜は京都の青年有志が主催となつて「聖法然の夕」が教育會館で開催された。主として中村、眞野、稻垣眞我

(佛教專門學校教授) 三氏を中心とする座談會であつたが、講演會とは別な意味で、數々の貴い收穫を得たのである。

茲に鑽仰會關係者一同を感激の涙に誘ふ特筆大書すべき出來事がある。大阪聯合支部の講演を控へて、眞野理事が休憩室で休んでゐると、或る人が封筒に何か入れて、眞野氏に手渡しして行つた。眞野氏はいづれ會員の申込みだらう位に思つて、その儘懐中して忘れてゐたが、後になつてふと思ひ出して開いてみると手の切れさうな百圓札が十枚出てきた。かゝる有意義な生きた仕事に是非使つてほしいといふ事であつた。減多に物に動じない眞野氏もこの眞の知己を得て兩眼を潤ませてゐた。この篤志家は是非とも匿名にといふ希望であるから残念乍ら、お名前を發表することができない。

鑽仰會維持會も關西方面の方々の發起で成立して、全國に維持會員の募集に着手した。これ亦素晴らしい成績である。(佐藤)



阿彌陀御尊像

賤の襖着の男

伝寫

吉田 初太郎

一

賤の襖著た跣の若者が疲れた軀をのめらせ物懶
い様で河原の水を呑むと、すぐに、いま着いた渡
船から草簇へ歩み去らうとする人たちを

「待たれい」

と、呼びかけてゐた。

荷を負つた旅商人と修験者は一瞥したばかりで

行過ぎたが、餌袋の干飯を頬張つた下司と太刀佩
いた水干姿の下臈と眉白い聖とが立止つた。

「こゝに阿彌陀像がござる。私の肌身離さぬ守り

本尊だが、御所望の方にお譲りいたしたうござ
る。御覽ぜよ。この通りの御姿——金も厚くかけ

てある。このやうな石に打ちつけたとて箔の落ち

る氣振もない。」

金襴の囊に納めたお厨子から取出すと、男は阿

せんりうゆきの
川柳雪とまぐ

代田重雄

雪を眺めてゐると、何んとな
く心が澄んで來ます。美と醜も
けぢめなく、一切平等に覆ひか
くして、天地一白その清澄な雪
の心こそ、大慈大悲のみほとけ
の心でありませう。

昔から雪をよろこぶものは、
犬と子供と相場がきまつてゐま
す。がしかし、雪には何か幼い
頃の想ひ出などがあつて、なつ
かしいものです。

徳川時代の「柳樽」を見ます
と、雪に關した柳句が澤山にあ
ります。蓋し川柳のゝぞいた雪
の世界、風情またさまざまです。
孝よりも雪は不孝が出來が

彌陀像を河原の石に力一杯に抛つた。びかり金色にきらめき、跳ね上るのを掌に受け、

「さ、見られい。この御姿の何處に金の缺けたところがある？ 靈顯あらたかなものでござる。」

どなたか欲しう思召さるるお方に、安うお譲り申しますぞ。」

下司と下臈は黙つて歩き出した。

「駄目か、今度も駄目か。ならばまた次の便船を待たう。」

いふうちにも男の瞳が、去りかける下司の餌袋から寂しく離れないでゐた。烏帽子も冠らず梳りもしない落莫とした男の様子である。

「お若人。」

たつた一人になつた聖がしづかにい落付いてつた。

「阿彌陀の御尊像を手離さうとは果報の盡きたこととござるよ。」

「仰せまでもない！ 私は果報に盡きたものでござる。」

草簇に腰を下ろし腕を組んだ男は、すぐ俯目して、ほつと溜息を吐いた。



つて (文政)

支那の孟宗の母は年老いてよ
しなきものを求める癖がありま
した。ある年の冬、竹が食べた
いといふので、孟宗は竹林へ行
きました。雪の深い頃で、竹
のあらう筈がない。孝心深い孟
宗は天に叫び、地に伏してひと
り歎きました。すると俄に雪
の大地が碎けて、竹が生じま
した。孟宗の孝心は天に通じた
のでありませう。孟宗は悦んで
それを取り、母に食べさせまし
た。母はどんなによろこんだ事
でせう。雪の孝この孟宗の故事
は支那の二十四孝の一つに数へ
られてゐます。しかし雪にはえ
てして不孝が出来勝です。この
柳句は雪で遊里へ居つゞけ、孟
宗とはえらい違ひです。
雪に寝た竹を旭が揺り起し

「見るところ、土地の人でもない。果報に盡きたと仰せの上は仔細もあらう。語られませ……」

「よくこそお問ひくだされました。私は遠い土地の者で國司の従者となり陸奥に下向の途中、病氣にかゝり主に見棄てられたものでござる。」

「無慙な！」

「醫藥の代に太刀も黄金も失ひ果てやつと取止めた命でござるが、現身の哀れさは、糧が盡きると餓うなる……」

「おゝ、そのために御尊像を……」

「そのためもある。しかし、そのほかの理由もござります。この阿彌陀の御尊像も照覽ある——私は眞面目な男だつた。信心深うもあつた。莫迦のやうに正直で蟲けら一匹殺せぬほどの小心者だつた。その私がこの不幸せでござります。所謂、この世、佛もないと思ふと、この御尊像、いとけな折より肌身離さず信仰したこの阿彌陀佛こそ、たい恨めしいばかりでござります。」

男は涙ぐんでゐた。

「御尤も！無理もないお恨みと存ずる。が苦しさを忍びなさい。それが御佛の慈悲でござる、忍ぶ

といふ機會をお與へくだされたのが！餓いなら禿と一緒にござりませ。今宵のお齋と宿をお薦めいたしませう。先づ、その御尊像を枕元に安置され今後の便りを與へたまへと一心に念ぜられたら夢の中にも靈顯がござりませう。とにかく私と一緒に來なさるがよい。」

墨染の衣の裾で草の葉を揺るがす聖のあとを、男は見紛ふまいと蹤いて行つた。

二

「何うでござつた？」

朝——日ざしの明るい寺厨の縁に、にこやかに座つてゐた聖は白い眉をあげて、相手を興あり氣に見成つてゐた。

「は、」

男は睫毛をあげたが瞳は暗かつた。昨夜、この聖のすゝめるまゝに、お厨子の阿彌陀佛に行末のたよりを與へたまへと一心に祈願を籠めた男である。

「阿彌陀佛の御示現はござらなんだか？」

「夢を見ました。見ましたが餘りのくだらなさ

雪折れ竹も旭が照つて雪が溶けると、自然に直くなります。

蓋しこの柳句の旭が捲り起し——といつて人事に見立つたところ、面白いではありませんか。

人の子を手爾波に乗せる銀

世界

「雪の日やあれも人の子樽拾ひ」といふ安藤冠里の名句の思ひつきです。安藤信友は奥州磐城平の藩主で對馬守と稱し、徳川吉宗公に仕へ老中となり、俳諧に名高く號を冠里といつてゐました。

黒犬を提灯にする雪の道

(寶曆)

闇夜の白鷺、雪に黒犬、この柳句の着想は仲々面白い。おそらく川柳子の實感であるにちがひありません。

雪中にさけぶをきけば四つ

に、お話しいたす張合もござりませぬ。」

「はて街ひ繕ひのないものこそ、凡人にはたよりなげに見ゆるものだ。お話しなされませい。」

「路を歩いておりますと、」

「路を歩いておると……」

「急に深い地割れに足を奪はれ既に奈落に墮ちる

ところ、手にさわつた葛葛にしがみつき、懸命に

耐へた怖ろしい夢でした……」

「手にさわつた葛葛に救はれたといふ譯だな。なるほど……」

と頷いて、やさしくかきやく瞳から慈悲籠つた眼ざしを送つた。

「これはくだらぬ夢ではない。何ものにあれ、手にあたつたものを棄てず大切にせよとの有難いお

さとしてあらう。お疑ひなされるな。」

「判りました。」

「さらば朝のお齋をお振舞申しませう。」

「忝う存じます。」

男は朝餐の馳走を受けたのち、居住正して慇懃にいつた。

「不思議な御縁で深いお恵みにあづかり御禮の言

葉もござりませぬ。お別れに形見のお印いたし度う存じますが相にく持合せもなく、失禮ながらこれにてお宿し下さりませ。」

髪の手二すじ三すじ引抜いて手渡すのを、

「御奇特、嬉しく頂戴致します。」

聖は受けとると同時に、左の指にくるくると巻いた。

「お形見、このやうに身に附けました。さらば夢のお告げを必ずお疑ひなされますな。氣嫌ようお出でなされることぢや。」

寺厨を出て山門をくぐらうとしたとき、男はものに躓いてばかりと倒れた。起き上つた刹那、我知らず手につかんでゐたものに氣附いた。薬一すじだつた。

(なんだ薬か)

棄てようとして眉白い聖の言葉を思ひ出した彼はそのとき本堂を振返つてゐた。

森を背負つた本堂の萱葺屋根が朝日に映えて淨らかであつた。

「これが、夢で知らせてくれたことか——」

男は寂しく諦めの微笑をした。

手なり (柳樽十篇)

昔江戸の町人の乗つた駕籠

には「ほうせんじ」「あんつぽ」

「京四つ」「四つ手」とありまし

た。ほうせんじ、あんつぽなどは

上等の駕籠で、時には小大名

もこれに乗りました、あんつぽ

は女子が多く乗りました。四つ

手は竹材を用ひてこきへたもの

で、小形でこれを辻駕籠とも、

吉原駕籠とも稱してゐました。

當時の市民の多くはこれに乗り

ました。四つ手駕籠——蓋しこ

の句の落ち行く先は言はずもが

なです。

雪を燈火として讀む急な文

(川添柳初篇)

支那の孫康は學問が好きでし

たが家が貧しかつたため燈火を

求める事が出来ず、冬の夜雪明

で書を讀み勉強し、つひに御史

三

その寺院から幾ばくも歩かぬところに昨日の河原があつた。浅瀬を擇んで川を渡り櫻田村からいくつかの丘陵を越え、神田川の澗を流れにさからつて歩いた。

男はだんだん不機嫌になつた。

松原に歩みかへし、並木の幹に足を投げ出すと、減入るやうな氣落ちで、もう一步も行けぬ氣がした。

羽音を立てた虻が、うるさく男の顔につきままとふのを、まだ手離さずにゐた一すじの薬で打拂ひして、

「こゝにゐたとて何にならう。下總へでも行かうか?」

疲れた心で、うつらうつら考へてゐた。

すると、松原路を過ぎつて來た輿が停つて、下藤の一人が長柄から肩を外して近づく

「おい。」

と呼んだ。

「なんです?」

思はず顔の硬ぼるのをかん

じた。

「ぶしつけながら、

お持ちのものを

若君が欲し

いと仰

せ



太夫といふ偉い人になりまして。この柳句は孫康の故事を句はせたものです。

雪の夜に炭部屋わるい隠れ所

元祿の復讐で憎まれものゝ吉良上野介、雪に炭でたちまち露見。

初雪に豆腐と毒を買ひにや

(安永)

初雪とは、年が改つてから初めに降る雪といふ説と、立冬してから最初に降る雪といふ説とがあります。しかし、初雪といへば、一般には立冬後最初に降る雪の事でありまう。この柳句の毒とあるのは河豚の事を言つたものであります。

初雪のたつた二尺は越後な

り (柳樽三篇)

たつた二尺、都會地ならば

られる。賜はらぬか？」

啞然とした男は振上げた眼を手許へ落した。

「こ、これでござるか？」

藥である。幾度となく棄てようとしたが、その都度浮ぶ眉白い聖の慈悲相に思ひ返へしてきた藥である。

「左様、幼いお方は他愛もない。貴公の所作に興を覚えさせられ欲しいと仰せになる。くださらうか？」

下臈は髪濃いなかから唇を綻ばせてゐた。

「この藥は仔細のあるものでござるが、折角の望み故、お薦めいたしませう。」

男はそれを手渡した。

興に戻つた下臈は、又引返してきて、

「若君は非常なお喜びでござつた。禮物と仰せられ、これをくだされた。受取らつしやい。」

大柑子三つを額はしい陸奥國紙に裏んで手渡した。

その興が、松原の中を遠去かつて、翹て消え去るまで不思議な感慨で見送つてゐたのは此の男であつた。

四

男は自分が何かに憑れたやうにかんじると、追はれるやうな氣持で、この松原をせかせかと歩き出してゐた。

(下總へ行かう！)

神田川に添ふて上白河、山中、富塚の部落を過ぎて奥州街道を西ヶ原へと出た男は、眼も遙かの草簇が風に戦ぐごとに、むつと氣も遠くなる草いさを一心に耐えてゐた。

日もまだ高かつた。柵にく憩ふ樹影もないので一通りの難儀ではなかつた。

その一すじの街道である。

淺葱の打衣、青黒の打袴、菅笠、草馬に跨つた人が、おのおのの荷積みの馬の口取した四五の従者を引具して來かゝつたが、

「水が欲しい。喉が炙けつくやうだ。この草いきれに眩暈もする。何處ぞに淨い水がないか探してくれ。」

と、従者に命じてゐた。従者たちは思ひ思ひ草簇を分けて、淨い水を求め

大雪ですが、さすが雪國の越後だけに、たつた二尺も誇張ではなく、正直で面白いではありませんか。

雪見船いらざる下戸の交り

ごと

雪見はいつの頃から始まつたものか、雪佛とか、雪だるま、といった雪で作りのものをして遊ぶは事は萬葉集などにも見えてゐますが、とにかく江戸時代には雪見の催はかなり盛んであつたやうです。

「東都歳事記」といふ本に依りますと「隅田川堤、三圓長命寺邊、眞崎眞土山、上野、不忍池、湯島臺、神田社地、御茶の水手、日暮里諏訪社邊、道灌山、飛鳥山、王子邊、目白不動境内、牛天神社地、赤坂溜池、愛宕山上、八景坂、吉原等都て

めたが、すぐに悄然と戻つてくるのであつた。

「無いか！」

抱を見る主人の眼は、従者のそれよりも暗然としてゐた。

「ござりませぬ。」

「無いか。名高い武蔵野の逃げ水——それも當然のことだらう。そなたたちの咎ではない。参らう、富家の部落へ着くまでの心棒だ。」

しかし、それまで堪えられぬ程、この人たちは遠い路を喉乾かせて來たのである。

従者は男が近づくと諦めきれずにいつた。

「このあたりに淨い水のあるところを御存知でせうか！」

男は、汗乾いた顔がどす黒く穢れた馬上の人たちを見た。

「この近くには見かけませぬ。何故の御入用ですか？」

「陸奥から商ひして京へかへる御主人が喉乾かせられ、水を求めらるのです。」

「水はない。しかしこの柑子を参らせよう。一時はお凌ぎなされよう。」

男は陸奥國紙の柑子を差出した。

主人は、そのことごとくを食ひ終つてから男に向つていつた。

「これでやつと蘇生つた。有難うござつた。御禮申上げやうもござりませぬ。」

喜んだ主人は従者に命じて、旅籠馬、皮子馬から干飯を餌袋一杯につめさせ、淨い布三段に添えて男に與へた。

別れぎわに、くれぐれも禮をいひつゝ一行は草簇の路を行き過ぎた。

男は三段の淨い布と餌袋を抱えて、何にがなしにふるえてゐた。

五

翌日、下總に入つた男は、

「大變だ、大變だ。」

と喚きながら駈走つて來る馬飼男の姿に驚いて立止まつてゐた。

馬飼男は烏帽子を胸に垂らし、汗疹の裾から裕衣(續鼻褌)を垂らしたしどけない様子で、小流れの水を椀に汲むと、あはたゞしく引返へつて

高臺は眺望よろし」とあります。

雪見には馬鹿と氣のつくところ

ころまで(柳樽拾遺初篇)

先の柳句の如くいらざる下戸の交りごとで不平をいつてゐる

うちは未だ無難ですが、上戸の雪に轉んだ所、馬鹿と氣の付く頃は既に遅い。

この雪で下戸は炬燵へ東山

(文政)

東山とは、嵐雪の「蒲團着て寝たる姿や東山」の名句を洒

落たもので、東山といつて暗に蒲團着て寝てゐることを諷した

ものです。

雪見とはあまり利口な沙汰

でなし

轉んで馬鹿と氣の付くのが落ちです。寒いのにわざ／＼雪見

するよりも、東山々々、雪見とは馬鹿々々しいと信

行つた。

路端の棟の下で、水干、烏帽子、黄金の太刀を佩た主が、

「疾く来い！なにをぐづ／＼する！」

と、もどかし氣に叫んだ。

馬飼男は、駈け着くと仆れた馬の口に、櫟の水を注いだ。

黄色い泡を立て、苦しんでゐた馬は、ぐたりと、鼻面を草に横たへると眼をつむつて動かなくなつた。

「死んだ……愛馬が死んだ！」

太刀佩た主は悲し氣に呟いた。

「大變だ、大變だ。」

馬飼男も馬のまわりを走り廻つて、おろおろ口走る。

「そのやうにうろたへ喚くな。惜しい駿馬だつたが、いまは詮方ない。鞍を解け。代りの馬を求めて来い！」

主はいくばくかの金を與へて馬飼男を走らせた。

代りの馬を求めて来る間も、主は未練氣に櫟

の水を口うちに流し込んだり、ふさふさした鬘を撫で下げて涙を落してゐた。

それは見るほど惜しい馬だつた。鹿毛の光澤といひ、均勢された四肢といひ、胴廻り、鬣、一點の非もない馬であつた。

主は馬飼男が代りの馬を引具して来ると、鞍を取替えさせ、打乗ると、死馬の始末を命じ、

「すぐ、始末の出来次第、あとを追ふて来い。」と棄言葉して野路を走つた。

しかし、馬飼男はその死體のかたはらに佇んで、じいつと考へてゐた。

男は近づくと膝をかけた。

「あなたは何を考へていらつしやる。」

「さればこの馬のことで、主は埋めよと仰せだが、非常な高値で購ふのを知つてゐる私にはそれも惜しく、皮など剥ぎたいと思ふが旅のことで如何したものかと思案してゐるところでござる。」

「成程、實によい馬だが皮を剥くも容易ではござるまい。では如何だ、布三段と引替えて、この死體を私にお譲りくださるまいか？私こそ、暇にまかせ皮を剥ぎたいと思ひまする。」

濃者

信州は雪の本場です。雪は手のもの、信濃者をつかまへて雪見とは氣が利きません。

十七で師匠は轉び弟子は濡れ (天保)

師匠は轉びとは「いざさらば

雪見に轉ぶところまで」といふ芭蕉の句の事、弟子は濡れとは、芭蕉十哲の一人である其角の

「夕立や田を三圍の神ならば」

の句の事前者の句の碑は向島

長命寺にあり、後者の句碑は同

じく三圍神社の境内にあります。俳道に心ある人の何れも

知るところです。

立聞きの雪に足跡置いて行

き (柳樽三十篇)

何か内證話、どうもこれは

氣になるものです。耳に氣をと

られたばかりに足許へ氣がつ

馬飼男は、眼をばちばちさせた。

「そ、それは眞實でござらうか？」

有頂天の喜び様で馬飼男は布三段を抱え、一散に、主のあとを追ひかけて行つた。

（この駿馬は蘇生える！）

男の心には、不思議な力で、この確心が萌して来た。

（一心に御加護を念じてみよう！薬一すじを淨布三段におかへくだされた尊い阿彌陀佛を！）

それは強い信念であつた。——疑ひを挿挟む餘地ないほどの、さまざまの喜びを得た男の熾い信念であつた。

「お若人、そなたはこの馬の屍を何うなさる？」

汗衫著て、鹿の皮の沓履いた髯白い翁である。

あはれむ眼で氣遣ふのであつた。

「布三段と、馬の屍と交易しても詮ないと思ひますが……」

「これは、稀れな駿馬でござりまする。」

「駿馬。——如何にも！しかしそれも息あるうちのこと、思召さぬか？」

「お案じなさいまするな。この駿馬を蘇生えらす

るのでござりまするよ！」

男は事もなげにいふのであつた。

椀の水で口を嗽いで、御厨子の阿彌陀像を安置し、忝しく禮拜した。

翁は、その一心不亂の様を見て、（痛ましい、氣も狂ふてゐる……）

と哀れに思つたが、それも束の間、あつと膽を消して後ろにのけ反つてしまつた。

蹴爪立つて、跳ね起きた馬であつた。馬は眠りから目覺めたやうに立上ると、ふさふさした鬣を宙に振捌いて、嘶いたのである。

六

「これは何うぢや！」

やつと立上つた翁は、その瞳からまだ驚きを抹

さずにゐた。

「そなたは如何なるお人ぢや。いや、人ではあるまい、如何なる御佛ぢや？」

翁は男の前に手を合はせてゐた。「やくたいもない。私はまぎれもない人でござり

きません、立去つた後に立開きの足跡歴然、頭かくして尻かくさずとは蓋しこのことでせう。

人參の白あへ雪の赤合羽

面白い見立です。さしづめ雪は白い大根。

竹の子が雪にはえぬと二十

三

先の支那の孟宗の故事です。

若しあの時雪中の筍が生じなかつたら、二十四孝にはならず、二十三孝だといふ句意です。

雪佛此世の道の邪魔になり

（天保）

雪でこさへた佛さま。古くは雪國の子供達がよくそうした雪遊びをしました。この句は先に

雪佛とあるので、此世の道といつたまでです。

轉ばずは翁の雪見果がなし

（文化）

ます。」

「人か？まぎれもない人でござるか？」

翁は近づき、しげしげと打見成つてから、大きく合點した。

「成程、人らしい。しかし、そなたは何んといふ豪い力を持ったお人でござるか。さあ、わしの家へ來られませ。わしはこの土地の長でござる。おちかづきになりたる存じまするぢや。」

翁には息子がなく、たつた一人の茅花といふ美しい年ごろの娘があるきりだつた。

男は駿馬の口取りして、すゝめられるまゝに長の翁の家に案内されて行つた。一日、いま一日、もう一日、と翁はたのもしく思つて、男をなかなか家から出さなかつた。四五日過ぎた。

外からい、い、い、ことかへつて來た翁は、
「さてそなた！事よりな御相談がある。きかせられまいか？」

といった。男が頷いて、膝を進めると、
「土地のもので京へ上るものがござりまする。長旅にも乗りつぶれぬ駿馬を探してゐられたが、昨日、そなたの持ち馬を見て大變に氣に入られ、是非とも譲られたいと強い執心で、わしへ仲介をたのむのであつた。」

「なるほど！」

「若しお譲りくださるなら、京へ永住の心組み故、田地も不要となるから駿馬の代に一町歩の田地に米すこしお添へすると申すのぢやが、御得心ならぬかな？」

「一町歩の田地を！」

思はずせきこんだ男は、ふと案じ顔の娘と眼を見交はした。

「御不承かな？」

「なんの勿體ない!!」

頭を下げるのを、翁は嬉しさに眺めてから、娘の方をも意味有り氣に一瞥した。

娘も瞳を明るくした。

「善は急げだ。ではそなたも一緒にござらつしやい。この相談をまとめませうから。」

翁は立上つてゐた。

かうして一町歩の田地の主になつた男が、乞はれるまゝに、翁の婿となつたのは、それからいくばくも經つてゐなかつた。

(おはり)

先の芭蕉の「いざさらば」の句の思ひ付きです。

大雪のあしたは竹も二日酔い大雪に臥してゐる竹、それを人事に見立た妙句です。雪見酒の結果の二日酔いで、どうやら頭も上りません。

さて雪の川柳は未だあります、が、遊里をあつかつた句が多く、ではひとまづこの邊で筆を擱きます。

(をはり)

師走の柳句

十二月なまじなまなか無いで樂人柄をぐつと見下す大三十日

(鈴ン坊)

生若い身でと炬燵を追ひ出され鈴を持たぬと追刺に逢つたやう

(古川柳)

年の暮金を拾ふて細がつき病人にまや物のある大三十日

(無智味)

隣では暖つたらしい年の暮掛取りの言譯になるか、り人

(古川柳)

掛取りの言譯になるか、り人

(古川柳)



山柿の葉

與謝野晶子

柱無き家の悲しく旅をしぬ杖のみあらばこ
と足りぬべし

日没になぞらへぬべきことを見し我れな泣
きそと山曇るなり

蟲の音が湖水と共にしののめを作るけしき
の山の上かな

おなじ程しら毛を濡らし山莊の犬の臥した
る朝露の草



伴ひて君と來し日も傷つきて後もたづねて
なつかしき山

湖の島の木立の山柿がはやく靜かに色づき
てけり

雲よりも派手に染みても湖へやがて落つべ
き木の葉ならまし

月ありて雲動くこと荒荒し湖畔の臺へ夜半
に出づれば

雨のうち白ばかりにも島小さくなるを嘆け
り湖の鴨

山柿の紅蠟の葉があたり皆霧となれども消
えぬ島かな



叔父さんの信心

(愛知) 元橋 君雄

私の兄は或る商品の卸問屋を経営してゐて同業者の間でも腕利きとして相當評判になつてゐる男です。未だ四十を越したばかりですが、小僧から仕上げて、兎に角自分の腕一本で卸商を経営するやうになつたのですから、その才能と経験とが並々ならぬ力となつてゐることは申すまでもありますまい。彼は自分でも良くそれを知つてゐて、何時もがつちりと物事を運んで行く仕事振りは他で見えてゐて

も頼しいものでした。ところが、その頼しい叔父に近頃面白くないことが起つたのです。「天魔が魅る」と云ふことをよく申します。が、これはまた飛んでもないものにひつかつたのです。所謂邪教です。

或る日兄の家を尋ねました時、五十がらみのでつぷり肥つた羽織袴の男が神棚の前でしきりに御祈禱のやうなことをしてゐるので、随分長い間、そののりとともお經ともつかないやうなものをあげてゐましたが、それが終ると叔父さんは丁寧にその男をもてなし、歸りしなに相當な金額を包んだ紙包を渡しておりました。あとで私は叔父に

『あれは××の神様と云はれる男でね、取引先先の御主人にすゝめられて、月に一度御祈禱をして貰つてゐるんだ。仲々御利益あらたかだと云ふ話でね。』

と笑つて別に大して乗氣でもない様子なので、交際の義理か位に思つて、その日は別に氣にも止めずに歸りました。

それから暫くして、同業者中の古株某氏に逢ふと『君の叔父さん此頃少し變だぜ。折角纏まりかゝつた關西の得意との取引きを急に斷つたそうで、先きでも一寸面食つてゐると云ふ話だ。——何んでも妙な御祈禱に凝つて、その神様のお告で商ひをしてゐると云ふ噂だが、今度のこともそれじやないかと思ふ。まあ、君からも忠告して置く方が良いな。』

私はこの話を聞いて、何時か叔父の家で逢つた羽織袴の男を思ひ出し、急に厭な氣持になりました。叔父は前にも申した様に、その商賣には長年の経験があり、その経験をもとに、仕事をがつちり運んで兎に角成功して來た男であります。年配にも達し分別もある筈

『今のは何んです?』

と訊ねますと、

の叔父が、得體の知れない男のお告とか云ふ言葉一つで取引を止めたり、始めたりするやうだつたら結果はどうなるのでしやう。その商賣に就いて最も經驗のある者が、何ら事情に通じない者の神が、りとか云ふ氣紛れ（敢て氣紛れと云ひます）な言葉を信用してその仕事を左右されると云ふやうなことが默つて見すごせるでしやうか。——私は早速叔父に逢つて話して見やうと思つたのですが、事情を確かめてからと、長く店に勤めてゐるS君を訪れて、先づ様子を聞くことにしました。同君は私の質問に甚だ當惑した様子でしたが次のやうに話して呉れました。

『あれでは私共も困ると思つてゐるのです。雇人なぞに對しても、お前には父親の生靈が就いてゐるとか、母親の死靈が付いてゐるとか氣味の悪いことを云つて脅したり、無闇に身體を撫で廻して、どこそこが悪いから、この神様に治して貰ひなさいと云ふ様なことを云ふし、人を雇うにも神様のお蔭が、りで、あの者はどう云ふ癖がある、この者はどう云

ふ病氣があるからおよしなさいと、本當に解つてゐるやうな調子でやるものですから、御主人もすつかり信用してゐる有様で、云ふなり次第になさいますし、店の



ものもなんとも申上げ様がない次第です。何分御信心のことです……

これには私もあきれて仕舞ひました。この調子で進んで行つたら、先はどうなる

んだらうと云ふことが、一番に私を憂鬱にして仕舞つたのです。一體長年人を使つてゐる者が、自分の眼で、その者がこの商賣に向かうか向かないかを判斷することが出来なかつたら、立派な醫者と云ふものがありながらそれを無視して、何等醫學の心得のない者の云ふことを、のつけから信用してかゝると云ふことが、今日眞面目に考へられるだらうか。……こう極端になつたら、人間の一番大切な己れと云ふものが何處へ行つて仕舞ふのだらう。人間が一番肝心なところで馬鹿になりきつてしまふではないか。妙な言ひ方だがこれは一種の内政干渉であり、何處の馬の骨か牛の骨か解らない奴に、貴い自己と云ふものを提供することではないか。信心と云ひ、信仰と云ふものは斯う云ふものなのだらうか？ いや、そうでない。或る坊さんの話を聞いたことがあつたが、信仰と云ふことは結局、己れを一層高めることであり、歪みがちな己れの心を常に眞直ぐに保たせるものである。即ち人間としての自己の理

性と感情とを一層淨化させるものである。失意に際して勇氣を振ひ起させ、得意の絶頂にあつて己れを反省させ、凡百の事物に深い愛情を注ぎかけるものである、と聞いてゐました。「南無阿彌陀佛」の御名號は唯現前の利益のためのみではなく、更に深い人間としての自覺と高まりとを願ふ事である、と聞いてゐました。これこそ本當の宗教と云ふものだと私は思つてゐるのです。

叔父さんの信心と言ふのはどうでしやう。

唯現世利益をのみ願つて、反つてそのために眼が眩んで、今まで確りと自分が立つてゐた足場を自分から突き崩してゐるやうなものではないでしやうか。富籤を引いてゐるやうな御祈禱のお聲が、よりで……

私はそう考へると早速叔父さんの家へ出かけて、卒直に自分の考へを述べました。始めは厭な顔をして聞いてゐましたが、根が利口な人ですから、しまひには私の云ふことに一々頷いてゐました。それでもまだ

「お前の云ふことは一々尤もだが、あの神様

も御利益は確かにある」と云ひ乍ら、誰々の病氣が治つたとか、この前神様の云ふ通りにやつて幾何々々儲つたとか云ひ出すのです。私は一々それを反駁してはゐられませんが、勿論澤山の事件の中には偶然の一致と云ふものがある筈です。然しそう云ふ一つや二つの偶然が全體を決する力があるでしやうか。此處まで來れば心の置き方の問題です。

聖意に抱かれて

(函館)

村田江楓

母が病歿したのは去年の五月、あの當市の大火災の直後でした。

私の家では分家して三十年ですがまだ死んだ人もなく、勿論お寺を持ちませんでした。

「私が死んだなら淨土宗になりなさい。お寺を中島町の法務所にするように——」といふ死に逝く母の言葉で、淨土宗稱名寺のお世話

だから私は叔父さんにそれ以上のことは云ひませんでした。が、時期を見ては叔父さんに注告を與へ、その御祈禱のインチキな事實を集めて、事實をつき付けて證明し、本當の信仰と云ふものに導いて、彼の眩んでゐる眼を開けてやらうと思つてゐます。これによつて救はれるのは決して叔父さん一人ではないと云ふのが私の確信です。

になりました。

私は以前から修養會といった風な集りに關

心を持つてゐましたが、たゞ思つてゐるのみで、お寺に修養會があつて月に三度づゝ若い方がお集りでお念佛をなさいます。一度おいでなさい——とお坊様に言はれましたが、行つて見たいなアと思ふのみでやはり行きそび

れておりました。

嘗てお念佛も申さず、お經文も讀まぬ私は亡母の靈前に向ひましたものゝ仲々お念佛は口を出ず、たゞボコ／＼と木魚を打つのみでした。南無阿彌陀佛の言葉が私の口から出ないといふ事は、亡母に對して眞に申譯なく思ひました。亡母の冥福を祈るには私の口から出る南無の一聲より外にはない——と思ひ佛前に向つてもやはり木魚を打つのみでした。これでは亡母に申譯ないと思ふと止め度なく泪が溢れます。

それでも目を經るにつれてかすかに、本當にかすかにお念佛が私の口をつき洩れるやうになつて、私の口からお念佛が出る——といふ事は私に限りない喜びを與えました。遂に意を決して——私には眞に大決心でした——稱名寺の法務所の修養會に行つて見る事にしお寺の近くまで参りますとサクツ／＼と爽やかな木魚の音、夕闇を突いて私の心の底に響いて参ります。

本堂に相當の御年輩の方も居られましたが

大部分は若い男女で、二三十人が懸命にお念佛を申して居りました。——他の方々に大聲で申せるお稱名が私の口からチツトも出ません。ずる分情なく思ひました。坊様のお話も



さつぱり解らず了ひに歸りましたが、私は何か斯う明るい氣持になりました。それから私は毎日朝夕一時間位づゝ亡母のみ前でお念佛と讀經を日課としました。

何の淀みなく私の様な者の汚れた口からさへ有難いご稱名が洩れるといふ事は本當に忝けない事だと思はれ、それにしても逝ける母よ！ 今何處にお在す？ といふ氣持が絶えず私の胸の奥にあり、餓鬼道に母を見出して愕き悲しんだ目蓮尊者の悲しみに心から同情されたりして、母を救ふものは私の念佛以外にない、私が信仰生活に入るより外に術がないと深く心に思ひ、一心にご稱名を申さして頂く様になりました。

母は自分の死によつて、私にお念佛を教へ否、母の死によつて私に御名を稱えさせられた大慈悲の如來様の聖意である——といふ事が最近ハッキリ思はれて参りました。數多い宗派の中で淨土宗を選び、里數にして一里以上もはなれてゐる稱名寺の本寺を措いて、同町の法務所を教えた亡母の氣持——その亡母を通じての如來の思召、決して輕々しく出来ない事だと思つて居ります。お念佛によつて、まだ私の知らなかつた廣々とした世界、光明に満ち充ちてゐる世界のあること

を識らされました。

私はいさゝか弓を引きますが、神人合一とか三身一體とか天地周圍とか、そんな事を懸念に考え、自分と弓と的とを離脱するところに本當の弓がある——として稽古したりしたものです。それがお念佛とピッタリ來てゐるらしく思はれたものですから、私には非常に嬉しく思はれました。

去年の九月初旬です。お寺で三日間のお別時がありまして、幸ひの日曜日を利用して参

列させて頂きましたが、その時フト亡母の膝

にもたれて遊んだ頃の私の幼ない時を思ひ出し、お念佛に於いても、私達は如來さまのお慈悲のお蔭に凭れかゝり纏りついて——安心して切つてみ佛に自分をお任せする事だと思ひつきまして、その事を會の方の坊さまにお話しましたら、先生はたゞ頷いておられました。只今の私は、お淨土は西方にあらうとなからうと、極樂が現世であらうがあるまいが、たゞ私は現に如來様は在します——と信じて

本當に生きる力を得るまで

(東京) 片山 初代

何か信仰をもつと、もつとほがらかになれますよ！ こんなことを云はれてゐた頃の私は、宗教など信ずる氣持にもなれなかつたものです。宗教なんてお酒みたいなものぢやないかしら……。そうだとしたら、お酒のすき

な人が勝手にお酒の効能書をならべてゐるやうなもので、お酒を嗜まない多くの人には、あつても無くても同じことで、その人にとつてお酒は全然必要のないものだ。意地つ張り屋の私は、その頃、自分勝手に

お念佛によつて攝取されてゐる事を感謝してゐます。どなたの前におきましても、目には見えませぬが、私達の親様は現前す——と斷言出來ます。

我々に佛心がある——と話されますとき、さうかと頷かれますけれど、しかし、私にも佛心があるのだと思はれますより、あゝ罪ぶかい私であると思はずにはをられません。

この汚れ多い私の口からさへ、ありがたいお念佛が申される——たゞたゞ感謝する外なく心からお念佛を申させて頂いてをります。

當時の智慧第一と申された法然上人様が、一文不知のおん身になられて修されましたお念佛、そのお念佛ゆえ私たちは安心してお纏り申してちつとも危ツ氣がないと思ひます。無條件に絶對的に信じ切つてよいものを持ちたいと思ひます。それがお念佛以外にはない事と思ひます。善きにつけ惡しきにつけ、惱みあるまゝに悶えあるまゝに悲しきまゝに嬉しきまゝに、お念佛申したいと思つてをります。 合掌

こんなことを考へてゐました。その癖、自分でどうすることも出来ない、複雑な感情に苦しめられながら、人さまの何の屈託もなささうな、朗かなすがたを見ては、羨ましがつてゐた私でした。その後――。

明るい氣分で迎へた朝の氣持、それは又何とも云へぬすが／＼しいものです。そしてその朝の氣分が私たちの一日にどれだけの影響を與えるか、くらいのことは、今更私が申すまでもないことです。

素晴らしく爽やかな氣分で新しい朝を迎へた日はそれは又どんな愉快な一日でせう！一日中がはちきれんやうな元氣のうちにしております。

すべてが感激のうちに處理されてゆきます。胸のうち中が幸福感で一ぱいです。ほんとに朝の氣分と云ふものは大切なものだと思います。朝の氣持ち一つでその日一日が明るくもなれば暗くもなるのです。

毎朝々々朗かな氣分でその朝を迎へることの出来る人生は、本當に楽しく、又本當に幸福だと思ひます。そしてこのやうな人生こそ

心から生きる甲斐のある生涯だと思ひます。私もこの頃では明るい朝を迎へることが出来るやうになりました。あんなにまで人さまが朗らかな顔をしていらしやるのを羨ましがつてゐた私が、よくもこんなになれたと思つてゐます。

それは矢張りお念佛のおかげでした。お念佛もうすことの出来るやうになつたおかげだと思つてゐます。

一日のつとめを無事に作し終へて、夜、床に就く前のひととき、今日一日の業をふりかえりつゝ、静かにお念佛致します。その尊い氣持――それは言葉で云ひ盡されません。

たゞ感謝にみち／＼した心です。幸福の泉の中に浸つてゐる氣持です。しかし決して陶醉ではありません。現前の事實です。はつきりめざめた心です。今でこそ、本當に人間に生れて來てよかつたと云ふことが泌々わかります。

宗教を信ずるやうになれてよかつたと思ひます。矢張り人間は宗教なくして、眞實の幸福を求めることは出来ないと思ひます。

かうした明るい、愉い満足感をいだいて眠りについた翌朝、目が覺めるや否や、すぐ、思はず口をついて出るのは南無阿彌陀佛、お念佛の聲です。朝ひと／＼きのお念佛。

――さあ、今日も朗らかに暮しませう、天地の恵みの中に活かさして頂きます。心の中には不安も焦燥もありません。晴々しい希望ばかりです。

就寝前、感謝の誠こめてお念佛した翌朝はきつとすが／＼しい朗かな朝です。

祝福された朝です。明朗な朝です。

きつと、床につく前にもうしたお念佛がすが／＼と眠つてゐる間にもつゞいてゐるのでせう。念佛の中に眠つてゐるのでせう。

私には、はつきり解つて來ました。嘗て考へてゐるやうに、念佛は瞬時陶然と酔ふやうな弱々しいものではなくて、人として人らしく眞に生きるための念佛、生きる力としての念佛であつたことが……。 (終)



旅路の芭蕉

宇野浩二

吉田貫三郎 畫

その晩は、その濱庇をかけたした、狭い庵のやうな小屋で芭蕉と越人とは泊つた。昨夜は、吉田の宿で、寒くはあつたが、疊の上で、二人ならんで寝、今夜は、保美の杜國の隠家で、枯葉を燃しながら、それを圍んで、三人は輪になつて寝た。再び二人が並んで寝る時があるであらうか。再び、三人が輪になつて寝る時があるであらうか。

風もないのに、夜が更けたせゐるか、波の音が、直ぐ傍に海があるやうに、近く聞えた。芭蕉は直ぐ眠つたが、杜國と越人はなかなか寝つかれなかつた。杜國は、まだ芭蕉と越人が訪ねて来てくれたことが夢のやうな氣がして、幾度も頭を上

げて傍に芭蕉と越人が本當に寝てゐることを確かめた。彼は嬉しく眠れなかつたのである。越人は、杜國が名古屋にゐた時、杜國が實に氣持よく金品を貸してくれた上に、催促しないどころか、返しに行つても決して取らなかつた事、實に深切な人で、俳諧の手引をしてくれたのも此の人だ、この人が罪に問はれるやうな事をする筈がない、と思つて、彼も亦、寝られぬままに、枕から頭を持ち上げて、寝てゐる杜國の方を見た。心は起きてゐたが目は瞑つてゐたので、越人は杜國が既に眠つてゐるのだと思つた。あの落着いた上品な顔、あの安から静かな寝相、——あの人が罪を犯すことは決してない、きつと無實の罪に違ひない。……彼は、悲しさと、痛ましさと、法の無情さを恨む心と、今度またいつ會へるかと思ふ不安とで、眠れなかつたのである。そのうちに旅の疲れで寝入つてしまつた。

その翌日、三人は、保美から一里程の道程のある、伊良古岬へ出かけて、洲崎で名物の『いらこ白』といふ碁石を拾つたり、鷹を打つ名所と云はれてゐる骨山へも行つて見た。それは陸が海に突き出てゐる南の先で、鷹は先づ此の地に渡つて来る、といふ言傳があつて、よく『いらこ鷹』などと萬葉の歌に詠まれてゐる所である。——芭蕉は、かういふ事を考

へて、古人の歌などを思ひ出しながら、一種の情趣を感じてゐた。と、その時、

「あれ！」と越人が叫んだ。

折も折、一羽の鷹が颯爽と飛んで來たのであつた。

「おお鷹！」

鷹ひとつ見つけて嬉し伊良古崎

かう芭蕉が詠んだ。この俳句の裏には、伊良古崎に隠れてゐる杜國を、うれしや、鷹が訪れて來た！ と云ふ歡喜の思ひがこめられてゐる。

三人は、鷹を見おくつてから、海邊の岩に腰かけた。そこは、赤石山脈が西南に走り弓張山脈渥美半島伊勢灣口、と次第に低くなつて、さすが日本有数の山脈も、この邊では、岸礁列になつてゐる、俗に伊良湖岬戀路ヶ濱と稱ぶ所で、海上、遙かに神島が、その間に三つ岩の岩礁が一直線にならび、右の方に答志島、遙かに伊勢の山山が見え、左の方に志摩の臺地が見える、古い言葉で云ふと、呼べば應へさうに見える、誠に美しい風景をなしてゐる。

「この景色も、なかなか結構ですが、この景色ばかり眺めてゐても、飽きるでせう」と、やがて芭蕉が云つた、「……ここから、一緒に立つのは、お互のために、よくないでせうが、

……どうです、杜國さん、來年の春……私は、國にゐますから、そつとゐらつしやいませんか、御一緒に、旅をしませう。」

「ええ、是非。……ああ、お師匠様と一緒に旅が出来るやうな日が來ようとは、……」

杜國は目に手を當てた。

この伊良湖崎行は、杜國に會ひたい、杜國を見舞つてやりたい、と云ふ一心で出かけたので、餘り丈夫でない芭蕉の體に可なりこたへた。別れしなに、今度は、杜國が心配して、「遠江の新井まで、馬を雇つて、お師匠様を、お乗せするといい、」と越人に云つた。ところが、行きのとき南へ向つて馬を進めた時でさへ、馬の鬣にしがみつくと寒い思ひをした程であるから、この新井へ行くとき北へ向つて行く道を辿つた時は、「歩くより辛かつた」と後で芭蕉が人にこぼしたほど辛かつたらしい。その、時田圃の中の細道を通つたときの思ひを、

すくみ行く馬上に氷る影法師

と云ふ俳句を詠んでゐる。馬の上にすくむやうに乗つてゐる自分は、寒さのために馬の上で氷るやうな思ひをした、その

形がそのまま田面に映つてゐる、と云ふ程の意味であらう。そんな風であつたから、鳴海の知足の家に歸り着いた時は、芭蕉は、半病人のやうに、へとへとになつてゐた、それを迎へた宿の主人の知足は次ぎのやうな俳句を詠んだ。

焼飯や伊良古の雪にくすれけん

それに答へて、芭蕉は次ぎのやうに詠んでゐる。

砂さむかりし我が足の跡

ところが、この伊良湖崎行の無理がたたつて、芭蕉は、風を引き、持病の痔が起つて、しばらく知足の家で静養することになつた。

藥のむ更でも霜の枕かな

しばらく静養のつもりが、すゐぶん長くなつた。

伊勢では、これも門人の、松葉屋風瀑といふ者の家を訪ねて、そこに十日ほど滞在した。或る日、芭蕉は一人で豐受大神を祀る外宮に参拜した。既に日が暮れてゐたので、一の鳥居の邊に行つた頃は、鳥居の陰の方はほの暗かつた。鳥居の向ふの杉林の神域には、ところどころ御燈明がともつてゐる。その御燈明の方に向つて拜んでゐると、高倉山から吹き下ろして來る松風が、冷たい夜の空氣を通して、身に沁みるやうに

思へた。それが何とも云へぬ神々しい感じを與へた。ちやうど晦日だつたので月はなかつたが、晩秋初冬の頃だつたので天には無數の星々が輝いてゐた。その星月夜の空を脅すやうに老杉が轟轟と聳えてゐる。その老杉の梢を高倉山から吹き下ろす厳しい風が揺るがし、終には嵐が杉を抱きかかへるやうに揺する。芭蕉は彼が最も尊敬する西行の歌を思ひ出す。

何神のおはしますかは知らねども忝なさに涙こぼるる

これには、西行と同様、僧形のために、神域に入ること許されぬ芭蕉の歎きがある。それは芭蕉自身が次ぎのやうな意味の文章を書いてゐるからである。

「腰に寸鐵を帯びず、襟には頭陀袋をかけ、手に十八の珠数を携へてゐる。僧に似て僧になり切つてゐない、俗人ではあるが髪は剃つてゐる。結局、自分には僧ではないのであるが、髪を結うてゐないといふ理由で僧の類と思はれ、神域に入ることを許されなかつた。」

そこで、芭蕉は一の鳥居の外から遙拜したのである。——或る日、芭蕉は、一人で散歩に出かけた。さうして、足の向くままに、歩いた。

宇治の町の東の神路山の麓に西行谷といふ所がある。これは、建久の昔、西行が、彼の好きな櫻が、吉野山より、この

神路山の方が勝れてゐると云ふので、その邊に庵を結び、そこで三年程くらしてゐた、と云ふ傳説があるからである。この西行谷に、山奥の西行瀧を源とする、菩提川といふ川が流れてゐる。これも、西行が、江口で時雨に逢つて「賤の伏屋」に一夜の宿を乞ふと、主ら遊女が拒んだので、世の中をいとふ迄こそかたからめ假の宿りを惜しむ君かな

と「口吟みながら行き過ぐる」のを遊女が呼び止め、世をいとふ人とし聞けば假の宿に心とむなと思ふばかりに

と答へる、そこで、西行がその伏屋に入ると遊女が彼の身の上を聞く、そこで、西行が彼の身の上を物語ると、その物語を聞き終つた遊女が「實に實にこれは凡人ならじ。と、眼を閉ぢて心をしづめ、見れば不思議や、今まで有りし遊女の姿忽ちに、普賢菩薩と現じ給ひ」と云ふ傳説から來た菩提川の邊を、通りかかると、その川で、土地の百姓女たちが芋を洗つてゐる。そこで、芭蕉が詠んだのが次ぎの俳句である。

芋あらふ女さいぎやうならば歌よまむ

西行谷から歸る道で、或る茶店で一服してゐると、茶を運んでゐる女が、芭蕉の腰かけてゐる所へ、白絹を持つて來て、

「私は蝶といふ者ですが、私の名を俳句にして下さいませんか」と云つた。

かういふ草深い所に、かういふ風流を解する女があるかと思ふと、その事だけに興味を抱き、いろいろ考へた末、蘭の花の床しい香は、恰も美しい蝶の羽根に香を炷いたやうな趣きがあると、

いふ風に考へた。これは少し持つて廻り過ぎた感じはあるが、それでも、と思つて、白絹に書いた。

蘭の香や蝶のつばさに炷き物す

芭蕉は、その俳句より、その事件に興味を抱いて、近頃にな



い朗かな氣持で、その茶店を出た。しばらく行くと、垣に薦を這はせ、窓の前に四五本の竹を植ゑた、草の庵に、これも風雅を友とする人が住んでゐた。その庵の前を通りかかつたので、芭蕉は、今度は、先きの俳句よりすらすると、次ぎのやうな俳句を作つた。

薦うゑて竹四五本のあらし哉

芭蕉が、故郷の伊賀の上野の、兄半左衛門の家に辿り着いたのは、十月中旬であつた。むかし母のゐた部屋の邊と思はれる所は、今はその跡さへなく、その邊に生ひ茂つてゐた萱も霜枯れてしまつて、その名残もない。見るもの聞くもの何れも彼も昔とすつかり變つてしまつた。兄の髪も、既に髪は白くなり、眉の邊はめつきり皺が殖ゑ、ひどく年を

取つた。芭蕉が
長い無沙汰の詫
を述べると、「見
らるる通り、や
つと息が通つて
ゐると云ふだけ
ぢや、」と年とつ
た兄は力のない
聲で云つた。

二人はしばらく
く無言で向き合
つてゐた。やが
て、兄は、守
袋を解いて、

「これが亡き母、

の遺髪ぢや。よく拜みなさい。長い間、國を離れてゐたお前
は、浦島のやうなもので、この遺髪は玉手箱のやうなものぢ
や。……が、お前もずゐぶん年をとつたなア、……」と、後
は、言葉なく、しばらく、泣きながら、遺髪を眺めてゐた。

手にとらば消えむ涙ぞあつき秋の霜



芭蕉の墓

郎、臍の緒

とあつて、裏に「正保元年甲申九月二日生」とある。それを
つくづく眺めてゐると、芭蕉は、少年時代から國を出るまで
の間の、さまざまの事を次ぎ次ぎと思ひ出した。——九歳の
年に、上野の城代藤堂新七郎良精に仕へた。良精は、俳名を

誠に、芭蕉にとつては、こ
の干枯びた亡き母の遺髪は若
しこれを手に取つたら、彼の
熱い涙で、秋の霜のごとく、
消えてしまふであらう、——
さういふ思ひがしたであら
う。

その翌日、芭蕉は、佛壇の
前で、ずゐぶん長い間、拜ん
でから、厨子の中の佛像や、
父や母の位牌を、しみじみ見
廻してゐた。と、ふと、煤と
芥にまみれた紙包が目につい
たので、明けて見ると、

「松尾儀左衛門三男、甚七

宋徳と云つて、俳諧の道に親しんでゐた上に、良精の嗣子の良忠は、殊に風雅を好んで、和歌を冷泉家に學び、俳諧を北村季吟に學んで、俳名を禪吟と云つた。芭蕉は此の禪吟に近侍してゐたので、和歌と俳諧をしぜん愛好するやうになつた。そればかりでなく、主命を帯びて京都の季吟の所へ使に行つたことが度々あつたので、季吟から和歌を教へられた事もある。萬治元年、十七歳の時、元服して、忠左衛門宗房と名乗つた。——やがて、芭蕉が、その一生のうちで、最も忘れられない事件が、彼の二十三歳の春、起つた。それは彼の主であり知己であつた良忠（禪吟）の急死である。それは、急病であるとも云はれ、自殺であるとも云はれたが、それは忠良の近侍である芭蕉にも分らなかつた。が、何より芭蕉の心を痛ましたのは、寛文六年四月二十五日、良忠が二十五歳で急死した時、生れた子がまだ丸一歳にならない事であつた。その年の六月十四日、芭蕉は、良精の命を奉じて、主君良忠の遺骨を携へて高野山に登り、遺骨を報恩寺に納め、厚く供養して歸つた。この禪吟の急死と、その遺骨を抱いて高野山に登つた事とは、二十三歳の多感な芭蕉の人生觀を、根柢から覆へした。それにも拘らず、彼は、高屋山から歸つて、納骨の復命をすると、今度は料理方の役を命ぜられた。が、同じ年

の秋、芭蕉は終に主家を去つた。その時、有名な雲とへだつ友かや雁の生別れといふ俳句を、藤堂家の戸に、筆で書きつけて行つた。——どうして、どういふ風に、芭蕉が郷里上野を立退いたか？——それには色色の説がある。先づ、この「雲とへだつ」の俳句の意味から穿鑿して行くと、主君の變事のために、これから諸友と雲の彼方に隔離する、これは生別れで再び逢はれるとは思はぬ、と云ふ程の意味であるが、普通「別れかな」とする所を、「生き別れ」とした所に、この俳句の強味があり、彼の決心の程がうかがはれる。併し、これだけでは、どうして、どういふ風に？」の答にならないから、先づ、藤堂家の舊臣某の談と云ふのを聞いて見る。

「芭蕉の主家亡命の事情は知らぬが、脱走者である事は確かだ。殊に、脱走はあの『雲とへだつ』の句で喧ましくなつたので、藤堂でも秘密にしておく譯にはいなくなつた。ところが、城代へ届出をしたとなると、藩制に觸れる事になる。そこで、芭蕉は、亡命後、たまたま故郷へ歸つて來ても、次兄半左衛門や俳諧の道の人々の外は、交情を絶つての内證者で、近所や舊知に、内々のことを頼んだと云ふことである、従つて丸の内などへは絶対に入れなかつた。ところが、その

うちに、脱走者と云はれる芭蕉の俳諧が認められて来て、江戸へ下る頃には、藤堂家でも不問に附したと云ふ、……」

次ぎに、明治になつてから藤堂家の家政整理に當つた某といふ人の話を聞くと、

「芭蕉は夜陰に乗じて、本邸の松の木を攀ち登り、門の屋根を傳うて脱走したもので、その登つた松を『袖擦松』と稱へたさうだが、私が藤堂家に入りする頃には枯れてなかつた。良資氏（その頃の主人）は、芭蕉を脱走者、不忠者などと云ひながら、芭蕉の筆蹟はなかなか大事にしてゐた。『袖擦松』は、登つたのではなく、凭れて泣いたのだとも云ふ、……」

最後に、最も異色のある種々の説を讀むと、

「乗馬の稽古に過りて落馬し、右手を損じ、刀を取ること能はざる爲めだと云ひ、蟬吟没後繼嗣の争起り、蟬吟の子良長僅かに一歳なるを奉じて家を嗣がしめたので、蟬吟夫人との間に醜聞を傳へられた爲めだと云ひ、主君の花見に陪席し、過りて袴を損じたるを、公の侍女袴を繕ひやりしに、同僚に見つけられ、君前に披露された爲めだと云ひ、寛文二年十九歳の時、蟬吟夫人の侍女と通ぜりとの冤罪に依ると云ひ、又、家兄半左衛門の婦と艶聞が傳へられた爲めとも云ふ、何れも信じ得べき程度の説とは認められない。

「後年、芭蕉が旅行に出て、芭蕉庵に不在の際、壽貞尼といふ婦人が其の留守居を預かつた事實がある、この婦人が、少年時代に關係した女で、上に述べた侍女か女中かが、即ち後の壽貞尼であるから、若い女との關係が露見して主家を去つたものだ、との説をなすものもある。……」

何れにしても、以上の諸説を、假りに悉く本當である、としても、假りに悉く嘘としても、結局、後の芭蕉の氣質が何處にも現れてゐる點で、芭蕉が、故郷と人の世が嫌になつて、故郷を離れた、といふ事だけは間違ひではない。つまり、

雲とへだつ友かや雁の生別れ

の心境である。これが二十三歳の作であるといふ事は、それだけでも、芭蕉が天才であるといふ事が出来るであらう。

ところが、ここに一つ、芭蕉が主家の聽許を得、て故郷を立退いたといふ説が最も本當かと思へる事がある、それは、彼が殊に二十年ぶりで歸省した時、蟬吟の忘形見の子が、芭蕉を招待したことである。その子は、未だ二十歳程であるが、既に藤堂家の當主になつてゐて、名は良長と云ふのであるが、やはり俳諧を好み、俳名を探丸と呼ばれた。或る日、この探丸から芭蕉の兄に使が来て、芭蕉が歸つてゐるさうだが、遊びに、来ては、といふ言附である。然し、芭蕉は、連の知里と

の約束もあるので、豫定の通り、吉野を廻つてから、もう一度こちら（彼の郷里）に寄るつもり、その時は必ずお伺ひする、と云ふ返事を良長の使にした。さうして、その翌日、知里と一緒に、兄の家に暇を告げ、大和に向つた。

知里の故郷は大和の國の、葛城下郡の、竹の内と云ふ所であつた。竹藪に囲まれた奥の方に、可なり大きな農家があつた。近づいて行くと、頻りに綿を打つ音が聞える。芭蕉には、そのびんびんと響く綿弓の音が、琵琶法師が琵琶を弾いてゐるやうに聞えた。その音は、又、芭蕉はかういふ山家に住んでゐる人々が、かういふ仕事にかういふ音に、慰められて、暮してゐるのに、心を打たれた。

綿弓や琵琶になぐさむ竹のおく

芭蕉は、二三日ここに滞在して、そこで知里に別れて、それから先きは一人旅になり、中將姫の傳説で名高い二上山の當麻寺に参つて、それからいよいよ吉野の山にかかつた。

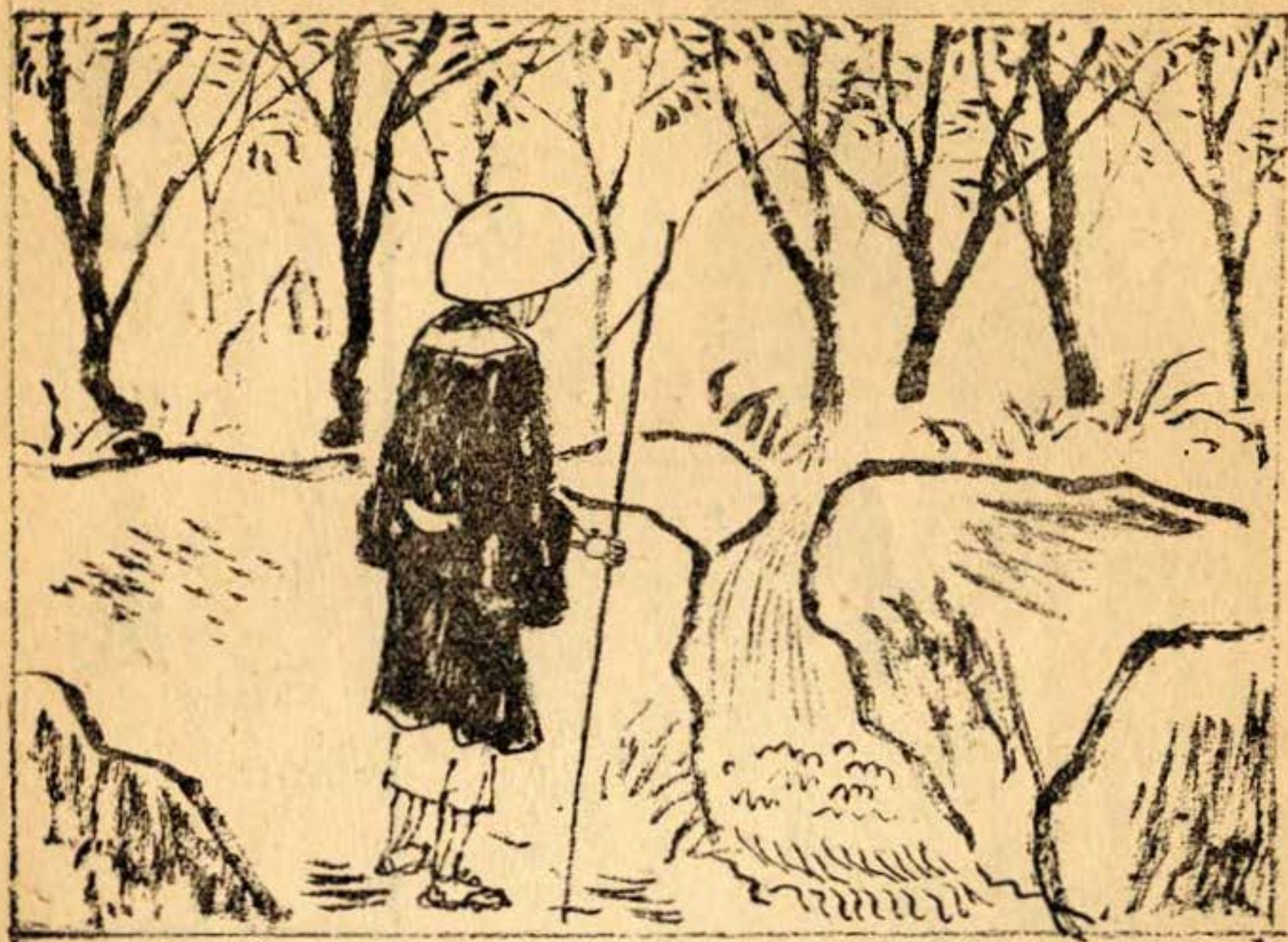
一人で、吉野山に分け入り、名所舊跡を探る楽しさ！ 行けども行けども、山また山、遠山には白雲を被り、深い溪谷は霧が立ちこめ、ところどころに、木樵の住處らしい家々が小さく見え、西の方で木を伐る音、それが東の方に弔し、折

から、寺々の鐘の聲、鐘の響、その餘韻は心の底まで泌み應へる。昔から煩しい世を逃れ、この山に隠れ住んだ、數多の世捨人は、みな詩を作り、みな歌を詠んだ。

或る寺をたづねて、一夜の宿をかりたところ、その寺の僧の妻が誠にまめな人で、何彼ともてなくしてくれた。靜寂な秋の山中の夜更けであつた。木の葉の落ちる音ひとつ聞えない山中の秋の夜の靜けさ。「みよし野の、山の秋風さよ深みて、古里寒く、衣打つなり」といふ雅經の歌も思ひ出される、かかる佗しさ堪え難い秋の夜に、「坊が妻よ、せめてものもてなしに、礎を打つて、聞かしてくれよ！」

礎うちて我に聞かせよや坊が妻

西行法師が、この吉野の山の中に、隠れ住んだ草の庵は、奥の院即ち金峰神社の奥、四五町の處にある。その道は、柴刈の人々がやつと通るぐらゐの細道で、それも峻岨な谿を隔てた所である。西行法師のやうな尊い人であつて、かういふ人跡の絶えた所に住んだかと思ふと、おのづから頭が下つた。「とくとくと、落ちる岩間の苔清水、汲みほす程もなき住居かな」と西行法師が詠んだ『苔清水』は、この草の庵から半町ほど行つたとところにある。



芭蕉は、この苔清水のところに來て、西行法師が飲まれた此のとくどくの清水は、今も昔と變らず、清い清水（露）を落してゐる、試みに、この清水で、浮世の塵によごれた心を洗はう、さうして、自分も亦、多くの勝れた歌を詠んだ西行法師にあやかりたいものだ、と思つた。

露とくどくこころみに浮世すすがばや

早や、傾き易い秋の日は暮れさうになつて來た。かねて見たい見たいと思つてゐた名所舊跡も、ところどころ見残して、せめて此處だけと思つて、御醍醐天皇の御陵に参拜した。

見れば、御廟は幾年月の風雨に晒されて古び、齋垣の下には、そちこちに、葱が生ひ茂つてゐた。

御廟年を経てしのぶは何を忍草

芭蕉は、故郷の上野で、杜國と會ふ約束をしたこと、杜國が訪ねて來る事になつてゐたこと、又自分が少年の頃大恩になつた蟬吟の子の探丸に此方から伺ふと約束したこと、——これ等の事を思ひ出すと、取敢ず、もう一度上野へ行かう、と考へた。考へると、矢も楯もたまらない氣になつた。

英傑 偉人 心の置き處

水上三吉

死の覺悟

新井白石が未だ若かつた頃、河村瑞軒に逢つたことがある。

その時瑞軒が白石に問ふに

『天下の將軍ですら、一生の

中には死ぬ程の思ひをなさるこ

とが二三度はあるとのこと。ま

して常人の我々には死を覺悟

する事、一生の中には必ずあ

りませう。御身も中々の人故、

左様な覺悟をなすつたことが御

座らう。』

白石も變つたことを尋ねると



は思つたが『左様、只今までに人と争ひこ
となどいたし、死を覺悟いたし
たことも二三度は御座いまし
た。』と答へた。

その時瑞軒は形を改めて

『その覺悟は皆惡う御座るぞ。

と云ふは、死を覺悟いたして、

今日まで死なずに済んだは、最

初から死なずともかたの付くこ

とであつたに相違ない。死なず

とも済むことに、只今まで二三

度も死を覺悟したほどならば、

今後は學問で死なうと決心なさ

い。死ぬ覺悟は人生の大目的の

ためになさらねばならないこと

である。唯、このことを申した

いばかりに先のやうな質問をい

たしたのです。』

と云つた。この一言によつて

白石は學問に奮勵し、將軍家宣

に仕へて大功績を擧げ得たので

ある。

少年の意氣

里見義弘公の家臣に正木大膳



と云ふ者があつた。十二三の時
から乗馬を習つたが、その都度
片手に手綱を持つことのみ練習
してゐた。馬術師範の者が、

『馬鹿なことをするな片手綱と
云ふものは、乗馬が上達して
からの事だ。まだ未熟のくせた
生意氣に片手で手綱をしぼつて
怪我をするな!』
とどなりつけた。然し大膳は平
然として云つた。
『侍の大將となつたら、馬か

ら降りて槍を合せ、高名を立てることは多くは御座りますまい。馬上にて下知を下し、そのまゝ勝負を決するためには片手綱を達者に覚えておかねばならぬ。」

と云つて決して改めなかつた。その言葉通り、後年數度の合戦に馬上で手柄を立てた。

平常の覺悟

朝鮮征伐の際、高麗の陣中から名古屋城へ注進狀を認めて、いよいよ諸大名が花押をする事になつた。ところが加藤清正の判形がむづかしくて大分手間どつた。福島正則は大いにもどかしがつて、清正に云つた。

『判形と云ふものは無造作な方がよろしい。病が重つて遺言

狀を認める時、手間がかかるやうでは困るではないか。』

清正はこの皮肉を聞き流して『拙者は何時でも、戦場の田の畠を枕に死ぬつもりでおるのだから、病死の期にのぞんで遺言狀を書かうなどとは思つてもおらぬ。印形がくどからうが少しもかまわぬ。』と笑つた。

偽されるが

武士道

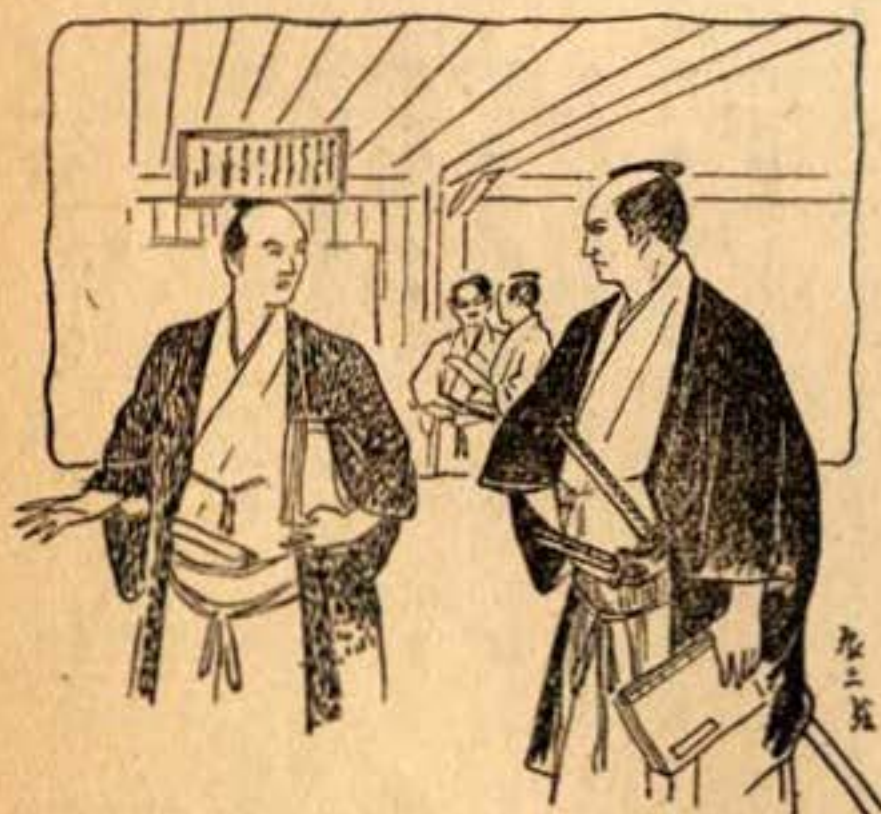
阿部豊後守忠秋が城中で政事を談じてゐる時、役人のある者が、人に偽されて迷惑を蒙つた、今後は決して、偽されぬぞと話したのを聞いて、

『それは御心掛けの悪いことだ。武士は決して偽りを申さ

ぬものだ。殊に歴々の人々が人を偽ると云ふことは無い筈。相手の申し分が正しければ重ねてだまされても良いではないか。

それを後悔の體で、これからだまされぬなどとは悪いお心掛けだ。武士は決して人を疑つてはなりません。幾度でもおだまされなさい。』

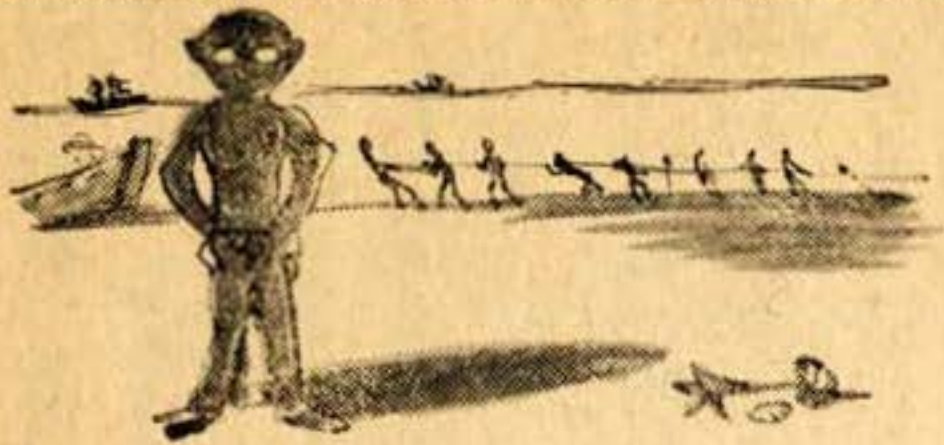
と申したので、一座のものは悉く感じたと言ふ。



上手と下手

福澤諭吉が大阪で、有名な緒方洪庵の塾に入つた時のことである。同塾の先輩がこの新入生に一杯奢らせやうと『長崎から遙々やつて來られたそうだが、以來別懇にお交際申し度い。就いては何處かで一杯酌み交そうではないか。』と誘ひをかけた。福澤はすました顔で

『酒は僕の大好物、是非御供しやう。だがお断りしておくが、旅費もかす／＼でやつと此處へ到着したくらひだから、金は一錢も持つておらぬ。だが酒と聞いでは見のがせぬ。是非お供いたしたい。』と云つた。『酒を飲めば金が要るのは



解り切つてゐる。それ位ひの金は持つてゐるだらう。」
 「いや、そんな金は持たぬ、だが酒は飲みたい。是非お供しやう。」
 流石圖々しい先輩もこれには参つて、その日はそれで物別れになつたが、翌日またその書生に逢つた際、福澤は今度はこつ

ちから催促したので、向ふで逃げ出して仕舞つた。その後二三ヶ月経つたある日のこと、福澤は例の書生を捕へて
 「僕が始めて入門した時、君は酒を飲みに行うと誘ひをかけたが、それは新入生は多少金を所持してゐるから、奢らせやうとの巧だつたのだらう。僕はそれ

を見破つたから、金がないと刎ね付けて、その翌日は僕から催促したに、君は一言半句もなかつた。憚りながら福澤諭吉、君が愚圖々々云へば即座に叩き倒して先生の處へ引揚つて行き先生の裁判を仰ふと思つてゐた。その決心が顔に現はれたから君は恐しくなつて引込んでし

まつたのだ。君の様な卑劣な奴がゐては塾風が悪くなるばかりだ。今後氣を付け給へ」と手痛く叱責したので、書生は大いに赤面し、塾風大いに改まつたと云ふ。

海人漁人が苦屋

吉水辨道

昔から賤しいものゝたとへにあげられてゐる、海人漁人——ほんとに海人漁人は動物のやうに浅

間しい生活をしてゐる人達だらうか、いや／＼決してそんな事はない、どんな錦の蔭に起き臥してゐる人間だつて賤しいものはいやしいし、又一見賤しい娘をしてゐる海人漁人の中にだつて玉のやうな美しい人格

者もある。如何なる人工の美しさも、自然の美には及びもつかぬ事が分る人には、よし金殿玉樓に人の世のたくみを誇るとも、此のほの／＼と浦かすみゆく宛然一幅畫中の天地である、海人漁人の苦屋にだつて、言ひ知れぬ美しさを發見する事が出来る。私はこゝに、世にもうれしい人格者である海人漁人の一人、Kの一挿話を物語らうと思ふ。
 — Kの家は、先祖以來、ずつと其の濱邊の漁夫だつた、Kも襦袢の中から磯の香

に包まれて生育し、まるで海の中から生れ出たやうな漁夫の子だった、従つて、どの岬とどの山とを結ぶ線に綱を入れれば何魚がかゝる事だの、どこの磯には何段の棚があつて何か巢くつてゐる事だの、まるで龍神の子みたいだ智識さへ持つてゐた。

然し諸行は無常にして萬物は常に變化してやまない、あの恐ろしい大正十二年の大震災が、其の震源地をKの海岸まで伸して來やうとは、神ならぬ身の誰か知らう？ 大震災以來、海底が激變して、所謂魚の巢が目茶／＼に叩き壊されて了つた結果、次第／＼に魚が捕れなくなつて來て、モウ今日ではK達の仲間では、殆ど漁夫では生活が出来なくなつて了つた。自然の不可抗力に對すべく人間の力はあまりにも弱い、小作農に轉業するもの、職人に變るもの、父祖の地を離れて都會へ去るもの、等々々、先祖以來の此の漁村に踏み止つて、細々ながら漁夫をつゞけてゐるものはホンの數へる程しか無くなつた。そして何れも、

人生の老の阪にかゝつて、今更ながら「喰ふ」ことを中心にした生活難といふものゝ、恐ろしさに震え上つて了つた。

生れ落てからの漁夫、家の何處を探したつて、魚を捕る道具より外には何にも見當らない、祖父も、親爺も、みんな此の綱を持つて、此の權をとつて、生きて來たのだ誰が、一度だつて、此の大きな海原を眺めて、これらの道具が不用になる時が來やうなどと思つた事があるだらうか、然し、夢ではない、生々しい現實として今其の時が來たのである。そんな莫迦な事が此の世にあり得やうか、といつて見た處で、此の押しも突きもならぬ鐵扉のやうな事實を誰がどうしやうもない。

人を恨み、世をのろい、つけるだけの惡口をついて見た、然し生きてゆくには、一時の胸は晴れてもそれだけでは役に立たぬ、Kが次第にニヒリストになつてゆくのも亦如何ともし難い成りゆきだつた。一體其の漁村は、一般に無學な、それだ

けに信心深い、むしろ迷信じみた土地だつた、そして何れも親先祖の御恩に感謝し、同時に佛恩の中に日暮らしする有り難さを感謝することを忘れなかつた。

だがKの心に芽生えた反感は、次第に育つて來て、今は人知れぬ苦悶に胸をたゞらす計りで、あの大人しかつたKが、ともすると老父と諍ひするやうになつたのもそれからだつた。

——ベツ、親か何だ、祖先か何だ、佛恩が聞いて呆れる、此の一日と荒廢してゆく村のざまは何だ、舟を見ろ、綱を見ろ、徒らに雨だゝきぢやないか、どこに親先祖の御恩があり、佛の恵みかあるのだ、今に見ろ、俺達漁夫は皆干乾になつて死ぬのだから……

Kは、かういつて心の中で嘔鳴らずにはゐられぬ程の逼迫を感じて來た。ある日Kは老父と例の諍ひをして、面白くもなく、ブイと家を飛び出した、すると何處から彷徨つて來たのか一人の見るも哀

れた天刑病の巡禮が此の漁村に流れ込んで来た、Kは一種異様な感に打たれて、此の巡禮を見守らずにはゐられなかつた。

巡禮に不思議はなかつたが、それは一體何を望みに生きてゐるのかと思ふやうな哀れな姿をして、而も落付いたものごし、幸福さうな顔いろ、人の蔑視も意に介しない只ひたすら天地の恵みを感じるとでもいつたやうな様子、それが、今イラ／＼するKの神経に一種不可思議な觸感を與へてならなかつた。

人間もあれだけ苦勞すれば一種の心眼が開けるのか、Kは直ぐ此の巡禮の後を追つて、其の心境を聞いて見やうかとさへ思つた程だつた。

此のホンの一寸した、何でもないやうなことが動機となつて、Kに、道を求めんとする機運が恵まれたのだ、彼にとつて眞に一代の福音が訪れたのだつた。

求めよ、然らば與へられん、求めざるもの前には山と積んだ寶も土芥の如し、道

は足下に通じてゐても、求めんとするもののみが此の道をゆき得るのだ。

Kが法の師を訪ねて、道を求めるやうになつたのも、それから間もないことだつた。

およそ道を求めて進まうとするものには光りがあると思ふ、いや、思ふだけではない、彼の生活は正に光明の生活である。

法然上人が、海人漁人が苦屋まで念佛の聲する處皆わが遺蹟なりといはれたのは、眞實今の身に現れた事實である。

Kは近頃よく人のため心からの親切をつくす、そして語つていふ、

——人は親切をつくしても、心の中では其の相手から報ひを求めてゐる、これが大きな誤りだ、報ひといふものは、思ひもよらない方角から、思ひもよらない時に、フツトやつて来るものだ、決して期待すべきものではない。——あゝこれが海人漁人の一人たるKの體驗から溢れ出る言葉であるとは。

彼は今は、貧しい漁夫の家業に不足もいはず、眞に家業そのものを楽しんでゐるかのやうに見える、そしていつも口癖のやうにいつてゐる、

——親先祖の御恩といふのは、残して下された財産のことぢやない、又勿論名譽でも家柄でもない、此の生命だ。此の生命の流れを我が身にうけて、人間としての使命にいそしむ事が出来る、その御恩だ。それだから、先祖の御恩は其のまゝ如來様の御恩だ——。

人は皆誰だつて、生きてゆくのは當然だと思つてゐる、此の當然な事の中に實に絶大な意味を發見する、いはゞ生命を發見すること、それがとりも直さず光明なのだ。

そして人生の方向轉換なのだ、Kは海人漁人の苦屋の中にあざやかに此の方向轉換をやつたのだ、

法然上人は、Kの念佛を聞かれて、此處にも亦わが遺蹟、といつておよろこびましますだらう。

讀者投稿募集

○信仰體驗談

△苦境に立つた時、私達の魂に呼びかけるもの——失意の人に勇氣と信念を與へ、再起に振ひ立たせるもの——日常生活の波瀾の中で、燈臺の如く光を放ち、私達の行くべき途を指し示すもの——それが信仰である。さうした體驗の一つ一つを取り上げて見やうではありませんか。元來それは貴方お一人だけが秘めておくべきものではなく、世の多くの人々への參考としなければならぬものです。用紙は、四百字詰の原稿紙で五枚以内。

○信仰相談

△信仰上のことについて何でも御相談に應じます。お解りにならぬことや、心の中で人知れず苦んで居られるやうなことがありましたら、遠慮なく御相談下さい。親切に喜んでお答します。但し、不潔面目なものは一切採りませぬ。葉書又は封書でお送り下さい。

○宗教實話

△邪教を迷信したことによる悲喜劇。その他、何に限らず宗教に關する市井の事實について、見たり聞いたりしたこと。貴方自身の御經驗になるものとは限りませんが、なるべく今生きてゐる事實を具體的に書き下さい。四百字詰五枚以内。

○和歌

與謝野晶子選

○俳句

松根東洋城選(目下)

△和歌、俳句ともに題は隨意です。一人三首以内。用紙は葉書又は同大書用紙のこと。

入賞

本誌に掲載せるものゝ内、特に優秀作に對しては薄謝を呈します。振つて御投稿下さい。

●種類 投稿は、それと上記の規定の用紙を用ひ右上の所にその種類を明記して下さい。例へば、「信仰體驗談」或は「和歌」等。

●締切 締切は毎月末日日本會館と致します。締切に遅れた分は審査を翌月に廻します。

●發表 發表はそれと翌々月の誌上です。

●住所氏名 住所氏名は封筒は勿論のこと、投書にもはつきりと末尾の方に記入して下さい。誌上の匿名變名は自由です。編輯部では必ず秘密を嚴守し、且つ誌上に發表された讀者の住所氏名は、本人の許可なくしては絶対に教へしませぬから、その點御安心下さい。

●文字 文字は必らず楷書で、行書や變體假名、又は略字などお使ひにならぬこと。尚、投稿された原稿は一切返却のお需めに應じません。

宛名

東京市芝區芝公園
明照會館内
法然上人續仰會

浄土編輯部

如何したら家の中が明るくなるか

跡見女學校長

跡見 李子

婦人のつとめ

わたしたち人間、特に一般女性にとりまして一番必要なもの、それはその人々自身の守本尊だと思ひます。守本尊を持たない人の一生と云ふものがどのくらい惨めなものであるかと云ふことは、世の中に澤山例のあることで、皆さんもさうした悲惨の生涯を送つた人々のあることを御存じのことだと思ひます。私の師であり、私の母であつた跡見花嫁と云ふ方は、この私の口から申しますのも如何かと存じますが、大變信仰の強い方でありまして、常日頃「信仰なきものゝ惨めさ」、「迷はざるものゝ強さ」と云ふやうなことに

て、口癖のやうに申して居りました。

殊に女はいろ／＼なことで惱み苦しむことが多いのです。それに一方では、夫のよき妻として、子たちのよき母として、その責任は非常に重く、一家の大黒柱とまで云はれてゐる程であります。事實、責任ある立場にゐる女の心懸け一つで、世の中は明るくもなつたり、暗くもなつたりするものです。舅、姑に對する嫁の心根、夫に對する妻としての情愛、わが子に對する母としての態度、又は小舅、小姑、乃至家の召使等に對する主婦としての心構へ、數へ分ければ女と云ふものは數澤山の役目をもつてゐるものであります。しかも、その中のたつた一つのことに對す

る態度や心懸けが悪かつたとしたら、到底幸福な、平安な生活は望めません。家庭内にかく風波の起り易いのも、皆女の心がけ一つだと思ひます。もし、夫に對する態度が悪かつたとしたらどうでせう。かうした妻をもつた男に限つて、家を離れ、子を忘れ、親の心配も何のそのと、外遊びに夢中になつてゐるものです。勿論、例外な方もありませうが、とかく、あゝした紅燈の巷にさまよい歩く男子の方を見きゝするたび毎に、その家庭における主婦の態度がまざ／＼と見せつけられてゐるやうな感じがして、寧ろその男の方に同情したい氣持にさへなることもあります。かうした場合、男子の覺醒と云ふことも非常に

家の中が明るくなるのも、暗くなるのも、それはみんな主婦の心懸け一つです。



大切なことには違ひありませんが、それと同時に家を守る主婦の心に何ものか、缺けてゐるやうに考へられてなりません。

大黒柱と云ひませうか、

扇の要と申しませうか、とにかく女と云ふものゝ責任は男よりも重いものであると云ふことを、はつきり自覺して居なければならぬと思ひます。たつた一つの小さな力だと思はれてゐない扇の要が外れたらその扇はどうなるのでせう。ばら／＼になつた扇は、もう何の役にも立ちません。實際、考へて見ますと、一家の興亡は勿論一つの社會、一つの國家の盛衰までが、この内助の役を仰つか

つてゐる女子の心懸け如何によると申しても、決してそれは過言でないと思ひます。それほど女子の持つてゐる使命は大きなものであります。

人間をつくる教育

跡見女學校の開設は明治八年で、今から丁度六十一年前、その創立者は私の先代跡見花蹊であります。女手一本で今日の跡見女學校が出来上つてゐることを考へましても、その間並々ならぬ苦心努力が續けられてゐたであらうことは、想像するに難くないことです。

況んや、この學校が出来ました時分、女子の教育機關としては僅かに東京に官立の竹橋女學校（今の女子高等師範の前身）と、横濱に外人經營になるフェリス女學校と云ふのがあつただけですから、跡見女學校は日本人の作つた民間に於ける私立女學校として、一番初めのものであります。それが今日の根強い基礎をなすに至るまでには、文字通り受難の歴史があり、一難一苦加はる毎に、撓まず屈



と像聖御の音觀櫻
生先蹊花

せず勇氣を振り起して、その目的と信念の前に敢然たゝかひつゞけて來たのが、先代跡見花蹊であります。

この先代花蹊の教育方針について、一寸申し上げますが、それは日本の婦人たる以上、どこまでも日本固有の婦徳と云ふものを損ぜぬやうにし、而も新しき社會の發展に對して後れを取らぬだけの教養を與へることが、女子教育の一番大切なことである。勿論、學校でありますから學科をゆるがせにすることの出来ないことは申すまでもありませんが、たゞさうした知識のみに傾いた教育では不具の人間をつくるのに等しいことで、本當の人間

をつくる教育としては意味をなしません。

人間をつくる教育、そ

れは知識の外にどうしても情操の方面に力を注ぎ、主婦となつたとき、

母となつたときに、立派に

その使命を果すことの出来るやうな人間をつくることです。つまり、婦徳の

涵養と云ふことが、あの女學生時代の一番大

切な教育であります。人間はこの時期に本當

の教育を施さなければ、一生涯役に立たない

人となつてしまふものです。あの若い時代を



なくてはなりません。かうした教育

をする人、即ちその師たり、先生たる人はた

ゞ知識ばかりに秀でゝゐたり、一技藝のみに

勝れてゐるだけの人ではものたりません。他

人さまの大切な子女をお預りするには、學徳

迂闊に過ごした人は、決して幸福な生涯を送れるものではありません。

ですから、此の時代の教育を施す者の責任も亦非常に重大なものであります。子女の生涯を思ふてする教育は慈母のやうな心で、邪悪なことをも厚く抱擁して、これを陶め治し正しき立派な人格へと導きゆく、本當に温か

き、慈しみのある教育で

ともに具はつた人でなければならぬことは申すまでもないことです。それには矢張り教へ導く者自らが、本當の正しい信仰に生きる人でなければならぬと思ひます。自分みづから守本尊を持つてゐることが必要です。

この業績

それに跡見と申す家は、もと迹見赤禪と云ふ家から出たもので、その大先祖は畏れながら、聖徳太子さまの四天王の随一として佛教興隆のため大層働いたと申し、今日でも迹家の墓所は奈良の法隆寺に残つて居ります。元來この迹といふ字と跡といふ字は全く同じ意味で、迹家と云ふに至りましたのは、佛教で本地垂迹といふことを申しますが、その垂迹の迹から出てるのだと承つてゐます。

かやうに佛教に因縁の深い家柄であり、且



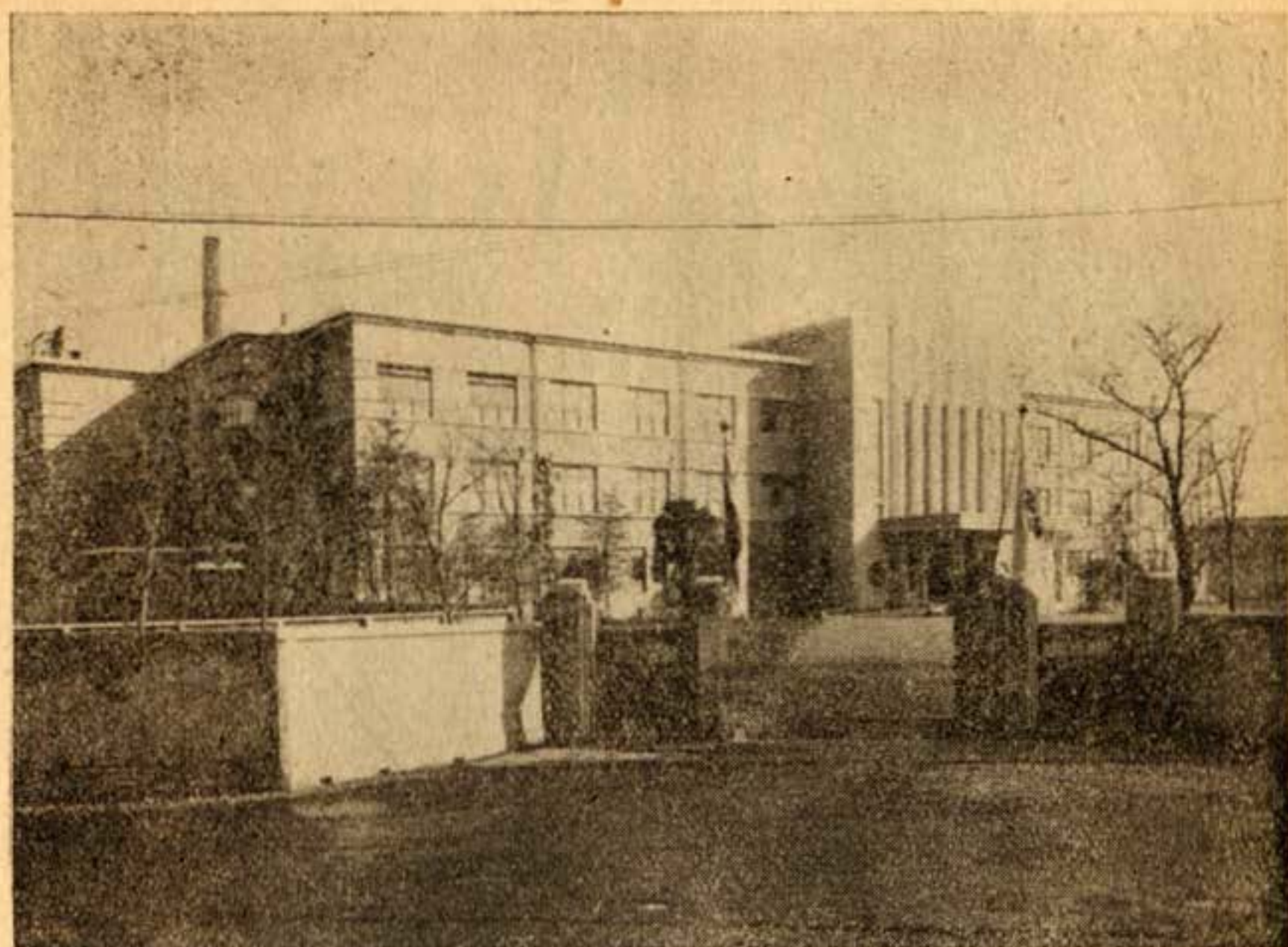
跡見女子史 女校長 跡見李女子史

つこの女學校を立てられた跡見花蹊と云ふ方は人一倍信仰の厚い人でしたから、その女子教育に當つてもつね々宗教といふことを重んじられて居ました。だからこそ、その教へ子に向つても、「信仰なきものゝ惨めさ」を

説き、女は可弱きものであるから特にその誘惑や壓迫のために打ち負かされたり、家庭人となつても惨めな生活、心さみしい日暮しをするこのないやうに、只管大きな力を頼み、その力を頼りとして強く生かさして頂けるやうに必ず守本尊をもたねばならぬ——と云ふ

ことを力説されてゐた程、宗教心と云ふことについては大變やかましく申してゐました。それほどですから、自らも若い時から人一倍、佛教を敬ひ、とりわけ觀音さまを大變信仰して、言行一致の實を、身を以て示されました。

それに先代は大變背の低い小さい方でありましたが、開校今や六十年、その卒業生は七千人を數へ、身體は小さくとも實に日本女子教育界に盡された偉勳は大なるものがあると思ひますので、その生前の功績を稱ひ、且つは追善のためにとも考へ、その教育並に宗教に對する志を長く永く學校の礎とし、ますます校運の發展と人間教育の完成をお護りして頂くために、故人の遺骨をお腹の中にお納めした觀音さまをお作りして、それを本校の守本尊に致して居ります。彫刻は斯界での泰斗、山崎朝雲先生が一刀三禮の御精進のもとに出来上つたもので、大變御相好のよいものであります。



正門より見たる跡見女學校

この観音さまを『櫻観音』と申し上げますが、これは

その當時の淨土宗大本山増上寺の御住職であつた、故道重大僧正さまが御命名下

さいましたもので、故人の遺業やその性格を偲び、且

つ「花咲」と申す雅號にも

ふさはしく、また、學校を象徴するにも大變ふさはしい

お名前であります。その上、

この観音さまの開眼式は、

現在跡見家の檀那寺である

小石川光圓寺の佐藤上人に

お骨折り願ひ、淨土宗執綱

の野上運外僧正をお迎へし

て、全校参列のもとに盛大

な御供養を致しました。現

在は學校の中にある先代の

記念書齋に安置し、智恵と

慈悲との御力をもつて永遠

の御加護を頂くやう、つね々々お祈りしてゐる次第であります。

マスコットを持て

観音さまは阿彌陀さまのお慈悲の方面を掌つてゐらつしやるお方とかで、殊にそのお姿がまことにやさしい女性として表現されてありますので、この御相好を拜んでゐますと、我が子のためには、たとへ火の中、水の中にでも飛び込んで、どんな無理でも聞いて頂ける、どんな苦勞もして下さる、何の遠慮も入らない母に對してゐるやうな氣持になり、ほんたうに温かい母性愛のやうなものをひし／＼と此の身に感じて、怒れる心も和やかに、邪な考へも正しくなり、すべての惱みや苦しみが、朝日にとける霜のやうに、胸の中が眞に明るく朗かになるのを覺へるのであります。これは信仰をもつ人にのみ味へる法悦の氣であります。特に感受性の強い女學生時代にかうした信仰を植えつけて、ともすれば乾きがちな若人の心に、いつとりとした

美しき心の潤ひを添へて描きましたなら、その人達の生涯はどれほど幸多きことだらうと考へます。

それがとりもなほさず本當に子女を教育する者の願とする所とならなければ、眞に家庭の人となつて役に立ち、社會に立つて立派に働けるやうな人間をつくり上げることは難しいことだと思ひます。

しつかりとした信仰を持つてさへ居れば、強く正しく、女ながらも朗かにぐん／＼とその興へられた大きな使命、妻として、母として、社會人としての大切な役目をらく／＼と果すことが出来るものと思ひます。何か一つ自分の守本尊をもち、心に信仰の悦びある女性こそ、一家の主婦として立派にその肩の要の大役を完ふすることが出来ると思ひます。かうした所から、本校では特に此の方面に留意して、子女の宗教的情操を培ふやうに努力してゐます。

實際、私などが先代のことを思ひましても、先代にあの力強い信仰と信念とがあつたから

こそ、今日の跡見女學校が出来あがつたものと考へるのであります。

こゝで先代のことばかり申してすまないことでした、事實、私どもが世に處して参りますとき、心の中に佛さまを拜む氣持さへあつたら、もつと安氣な心で暮すことが出来ませうし、その上すべてのものが圓滿にすらすらと運ぶことが出来るやうになりませう。

心の中に、人知れぬ苦みを抱いて、一人惱み悶へて居られる方がありましたなら、どうか一日でも早く、あなた自身の守本尊をお求めになるやうにお勧め致します。心から、手を合し拜む氣持になつてご覧下さいませ。神佛を拜む氣持のない人の生涯ほど、悲惨なものはありません。それは人としての幸福な途ではなく、それこそ此の世々らの惡魔の生活です。

一度、拜む心が出ましたら、あなたの世界はもつと明るくなるでせう。あなたの生活はもつと祝福されるでせう。あなたも朗かに、

みんなも楽しく、一家團樂、和やかな空氣がみち／＼と、此の世に生れ出たことの幸福を、しみ／＼悦ばれる日が来ることと思ひます。

(小野佐世男畫)

小話 燈臺もと暗し

或時、濱邊で子蟹たちが面白さうに遊んでゐました。そばで眺めてゐた親蟹が、『お前たちはなぜそんな歩き方をすのだ。横へ横へと歩くなんて見つともないぢやないか。』と云ふと、子蟹が、『ちや、教へて下さい。』と訊きました。『かう云ふ風に歩くのだ。よく御覽。』と答へて、親蟹は見當をつけ、眞つ直ぐに歩かうとしましたが、どうしてもうまくゆかず、右へ這つたり、左へ這つたり、その様子のをかしさに、子蟹たちは一齊にどつと笑ひ出しました。『お母さん、あなたに出来るやうになつてから教へて下さいね。』さつきの子蟹が申しました。他人のなり見て、我がふり直せ、とはこのこととせう。『燈臺もと暗し。』とはよく云つたものです。



いけばなの面白味

……お正月の花と水上げ……

中村式盛
瓶華家元 中村道邦

一概にいけばなと申しましても、矢張り時代の影響を免れません。今迄の生花は何の花でもその流儀なりに直して生けますので、どの花も同じ型になつてしまひます。これも結構で御座いますが、近來のいけばなの特徴は潑刺とした花の個性を生すと云ふことにあります。元來花と云ふものは大地に確り根を張つており、大自然の力でその持前の個性を生かしておるものであります。ですから、いけばなの使命は本來の生命を失つておるその切花に、別な場所で本當の生命を出してやる、花の姿態を最も適切な形で生かす、と云ふ處

にあるのだと思ひます。例へば、松、竹、梅或ひは椿なども其の花の個性を生かして、そこに天地人を出すと云ふようにしたいものです。

これは花からも人からも死活の問題であります。いけばなの本當の面白味と云ふものはかう云ふところにあるのではないかと思ひます。

花を生けるにしましても、本當に花も生かし、自分も満足すると云ふところまで参りますには、矢張り心の持方が大切だと存じます。よく新聞社から頼まれたりして、寫眞花

をとつたりする際に、どうしても自分の思ふやうな花が出来ません、その花は花型も悪くなく、どこも直すところもなく、唯力がないやうな氣が致します。それは自分の氣持と花が一致しない事であります。自分の氣持と花とが必ず同一でなければなりません。よく「無念無想」と云ふことを云ひますが、花を生けております時には、餘計な考へ事をしておつたり、雜念が付き纏つておりますとどうも力の入つた花が出来ませぬ。花に精神を集中する、花と己とが一つになると云ふ境地は、いけばなでも第一に必要なことであります。

お正月の花と 水上げの仕方

お正月の花としましては大概松竹梅と云ふことになつております。これは花としましては大變お目出度い花であります、いけばなとして見ますとあまり結構とは申されません。配色と云ふ點から見ても、くすぶつてゐて面白くないのです。配色と云ふ方から見ます

と、松に薔薇、松にてつぼう百合などはずつと引き立つた感じを出します。古木の梅に松ではどうしても冴えた配色にはなりません。松に千両、松に葉牡丹などは判で押したやなものでありますし、又は松に寒牡丹などは非常に結構ではありますが値段も高く一般にはどうかと思ひます。そこで松に薔薇などを配した方が配色の點から見ても、松も生き、薔薇も生き、結構なものが出来きますから、これ

は是非お薦めしたいと存じます。しほれた花は、たゞ無闇に水をかけては反つて花を痛めると云ふ結果になりますから、そう云ふ場合には、先づ逆さ水をかけて、新聞紙にくるんで、しばらく寝かしておきますと立派に生き返ります。これから水上げを致すのですが、その仕方には色々ありますが、誰方にも他易く出来て効果のあるのを一二申し上げませう。



松 と ら ば

花により

まして、焼きますか、或ひは煮上げをするか、それぞれ適當な薬に浸し直ちに水に入れることが必要と存じます。

例へば、菊などは葉がしほれ易いものですから、前に述べたやうに、逆さ水をかけてから葉が生々としたところで、先ず小さい鍋に鹽湯を沸湯させて置き、花は根本一寸(四厘)だけを出して布でくるみます。そして、その煮湯の中へ根元を十秒間入れて、直ちに深水中につけます。その時間は十五分以上卅分位ひです。そうして置いてから取出して自分の思ふやうな型にいけます。

またメンタ油一、アルコール一の割合のものをつけましても、薔薇その他の草木には有効であります。

その他申上げ度いことも御座いますが、紙面の都合で次の機会を待ち度ひと思ひます。

御承知でせうが

雑巾を搾つた汚水を、肥料にでもなるかと考へて、植木にやる方がありますが、植木はその根でも呼吸してゐるのですから、埃のまじつた水などをかけて、土の表面を塗りつぶすことは却つていけません。

信 仰 相 談

名號の意味

(問) 南無阿彌陀佛の六字の名號の意味を聞かせて下さい。其一字一字に何んなに佛菩薩と關係し何れ程の佛菩薩が籠められて居るか、又神道の神々が何んなに籠められて居るか、南無の譯名阿彌陀佛の譯名、そして其一字一字が人々の煩惱を封じて仕舞ふこと、そんなことを御願ひます。南無阿彌陀佛の中に八萬四千の法門が籠つて居ると聞いた事がありますが、よく判りませんので御尋ねする次第です。

(朝鮮 七ヶ年病床人)

(答) 此欄の問題としては、問題が多過ぎて充分に御答へが出来まいと存じますが一應申上げて見ます。如来秘密神呪經と云ふ御經には「阿字十方三世佛、彌字一切諸菩薩、陀字八萬諸聖教、法報應三身、空假中三

諦」が籠つて居ると云つて居ます。そんなことから南無阿彌陀佛の一字一字に當てはめて一切の佛一切の菩薩、一切の神々を配當して天地一切の神佛が籠められて居ると云ふ意味の事を書いてある本を見たことがありました。が、今ハッキリ覺えて居りません。然しそれは「念佛は萬行の宗致」とか「果號の三字は衆德の根源」だとか云つて居る丈で盡きて居る譯で、拙らない配當だと思ひます。昔の人はよくこんな穿架をしたものです。念佛を眞言陀羅尼の如く考へるところに間違ひを生じ易いと思ひます。貯金でもするやうに念佛が澤山たまつたから功德が多くなつたと云ふやうな功利的な氣持が起つたら、信仰とはスツカリ異つたものになります。

歸元直指鈔と云ふ本に「法門は八萬四千あれども一句の彌陀に如かず」とあり、大原問答には「萬善の妙體、名號の六字に即す」とあります。それ丈でよいではないですか。無論淨土教でも「佛の四智、三身、十力、四無畏、相好光明、說法利生」等の功德が阿彌陀佛の名の

中に備はつて居ると云つて居ますが、阿彌陀佛は一切に無量であり給ふ佛ですから「萬德所歸」であり「信仰の極致」であることは申す迄もありません。「阿彌陀」とは「無量」と譯し一切に無量であり自由である意味です。それを人間的には「生命」と「向上」とが一番望まれるものですから、一切の無量の中から特に「壽」と「光」とが取り出されて「無量壽」「無量光」が私達に直接したものと成つて居る譯です。善導大師の觀經疏玄義分と云ふ書物には「南無とは即ち是れ歸命、亦た發願回向の義なり。阿彌陀佛とは、即ち是れ其行なり、此の義を以ての故に必ず往生を得」と云つて居ます。是で見ると南無は歸命と云ふことです。歸命とは、命に歸ると讀めるし、命を歸すとも讀めます。信仰的には何つちにも通ずると思ひます。阿彌陀佛の無量壽命の中に歸入する氣持又は此の私の小さな命を命の本源たる阿彌陀佛に捧げて仕舞ひたい氣持、向ふを主にするか此方を主にするか、の相違です。此の小さな私の命が阿彌陀佛の無量

信 仰 相 談

壽に置き換へられたら何んなに嬉しいでせうね。だから南無は亦發願回向の義でもある譯です。日本流に云へば「どうぞ」と云ふ事になりま

す。「佛」とは覺者、簡單に云へば「阿彌陀」になつた人のことです。めざめとめざめしる力とめざめの行爲との三を完成しつゝある人のことを申します。かうした一切に自由であり、常にめざめゆく大生命の中に歸一することが出来れば、煩惱などは木の葉のやうに吹き飛んで仕舞ふこと

でせう。また神道の神々と何う云ふ關係があるかは私は知りません。大方、神佛習合とか本地垂迹とか云ふことから何か云はれて居るのでせう。法然上人の小消息には「本願に乗ずることは唯だ信心の深きによるべし」「一念むなしからずと信じて無間に修すべし」とも云はれて居ます。理窟を考へたり、變な處にコダ

ハラウとして居るのは貴君の心の中に集喰ふて居る惡魔の仕業ですよ。一つ惡魔を追ひ出すべく一生懸命に念佛して下さい。倦きずにして攪ますに。

至誠と利益

(問) 「神や佛が此の世にあるとか、無いとか論争する人があるが、そんな事はどうでも良い。願ふ誠の心より來る利益が神の姿である」。又悲しむのものも心からで神様は決して無理な願はしてくるな、一すじの心になつて來い、必ず良いむくいがある。不和な家庭が圓滿になり病氣も或る程度まで治療されるのを見せられては、人はどうでも、自分は信仰しないではゐられない。」と。右は神の信者の言ですが、佛教の方でも此の心境を以て信仰いたしたいと存じます。如何でしやうか。(磐城 佐藤末太郎)

(答) 御尋ねの要點は二つのやうに思ひます。一は至誠と云ふこと、二は信仰の利益と云ふこと。紙面がありませんから簡単に

御答へ致します。至誠であつて然も熱心に求めると云ふ事が大切で、單に至誠でありさへすればよいとも云はれません。彼の「心だに誠の道に契ひなば祈らずとても神や守らん」の心境は信仰の人にして初めて得られるもので、信仰なき者には一種の慰安にしか過ぎません。信仰なき人の至誠は唯だ良心をのみ基調としますが、信仰人の至誠は完全なる最高人格を中心として盡くすものですから、是れでよいと自惚れることもなく何處迄も求めて止まない無上至誠の追求者であります。第二の信仰の利益は副産物として有り得る事で、幾多の例もありますが、それは第一義的なものではありません。即ち求めずして得られるところの利益なのです。もし功利主義でやるならば一種の邪道です。佛教ではこれを「有所得」と云つて嫌ひます。無所得の氣持に依る精神的潤達こそ本當の信仰の心境です。

回答者 中村辨康

(質問ははがき又は封書で「信仰相談」と表に朱書すること)

極樂淨土は何んな處か

(阿彌陀經講義 其の二)

中 村 辨 康

(四) 完全な社會組織

私達の現在生活の中には、不要なものが澤山ある。以前には必要であつたかも知れぬが、今では間に合はなくなつたり、不要になつたりして、そこら中にゴロゴロして居る謂ゆる死物冗物がかなり多い。

保存癖と云ふものが、さうさせて居るのかも知れない。早い話が學校を出て何處かへ奉職した頃には、荷車一臺で充分だつたのに、妻君を貰ふことになつて一軒の家に主人となるべく二階の間借りから移る時には、何うしたつてトラック一臺では少し足りない。それから數年過ぎて子供の二三人も出來ると、今迄の家では狭まいから、もう少し広い家へ移轉しやうとすると、直ぐトラック三臺は必要になる。そしてそれ等の荷物が毎日必要なものばかりかと云ふに決してさうではない。一年に一邊位のものもあり、甚だしいのになると、幾年過ぎても仕舞ひ込まれて顔を出さないものさへある。「筆筒の肥し」さう云つた類のものが年と共に出來て來る。

また人間と云ふものは妙なもので、兎角、周圍に引き連られ勝である。隨て無駄な事物が周圍に

(本文)
極樂國土、七重欄
行樹、皆是四寶、
周匝圍繞、是故彼
國、名曰極樂、(外
景)

(字解)
欄楯ハ欄干
ハ横木、柱、楯

羅網ハ極薄イ網
四寶ハ梵文ニハ金
銀、青玉(ルリ)
水晶ノ四ヲ舉
グ、

周匝圍繞ハメグリ
廻ッテ居ルコト
七重ハ復雜セル相
關々係

(本文)
極樂國土、有七寶
池、八功德水充滿
其中、池底純以金
沙布地(外景)
四邊階道、金銀瑠
璃、玻璃、合成、上
有樓閣、亦以金銀
瑠璃、玻璃、赤珠
瑪瑙、而嚴飾之、
(建築)

(字解)
七寶ハ金、銀、瑠
璃(青玉)、
玻璃(水晶)、
赤珠瑪瑙、
(白色ノ貝)赤珠

多いと無駄な時間を取られ、拙らない事に齟齬して居る。何時迄たつても冗物多く、冗事多く、爲に人間迄が冗人になつて仕舞ふ。

人多き人の中にも人ぞなき、人となれ人、人となせ人

と云ふ歌もあるやうに、冗人ばかりがゴロツチャラして居ては、本當の仕事の邪魔になるばかりである。

それが私達の現状なのだからなさない。

先づ家庭を見よ。本當の理想的な家庭になつて居るか何うか。

次に社會を見よ。本當の理想的な社會になつて居るか何うか。

丸でなつて居ないではないか。

然るに阿彌陀經に説く極樂には冗物なく冗事なく冗人がない。

先づ其國の組織を見やう。

最初に風物が擧げられて居る。

即ち金と銀と瑠璃と水晶の四つの寶を以て合成されたる欄が道に添ふて右に左に縦横無盡に建て

られて居り、其兩側には四寶を以て網まれたる極めて薄い網のかけられた並木が整然として自生して

居る。それらは皆悉く其一つ一つが七重に相交錯して居て其美觀は云ふばかりもないが、其七重の

欄の外には長方形の美しい水をたゝへた七寶の池がさゝ波を立て、八つの功德を備へた池水を透き

通して池底の金沙がまばゆきばかりに輝き、池の廻りには四寶の階廊の道があり、其階廊の上には金

と銀と瑠璃と玻璃と碑磔と赤珠と瑪瑙とで構成された樓閣が建てられて居る。上を見ても下を見ても

(赤眞珠) 瑪瑙
(石英ノ一種)

樓閣 高キ殿堂

八功德水 清淨デ

アル、臭クナイ、

輕イ、冷イ、軟

カ、美シイ、飲

ミヨイ、飲ンデ

アタラナイノハ

種ノ徳アリ、

(本文)

池中蓮華、大如

車輪、青色青光、

黄色青光、赤色

赤光、白色白光、

微妙香潔(外景)

(字解)

微妙香潔 何ト

モ云ヘナイ潔ギ

ヨキ香り

(本文)

彼佛國土、常作天

樂、黃金爲地、晝

夜六時而雨曼陀羅

華、(降雨)

其國衆生、常以清

且、各以衣被、盛

衆妙華、供養他方

十萬億佛、即以食

時、還到本國、飯

食經行(行事)

(字解)

天樂 天ハ最勝ノ

意、

スグレタル音樂

右も左も悉く實ばかりで雜物が無い。皆な有用な寶、即ち活動價値の高いものばかりである。冗物は一つもない。皆な有効に役立つもののみである。池の水にしろ生活の上に八つの効果を持つ貴重なものである。池の中の花も單に色ばかりでなく、それぞれに光りを放つて居る。即ちそれぞれの特色を發揮して居て、最も効果的に働いて居るのである。下らなく埋れて居るやうなヤクザものは一つもない。其上に互に七重に重なり合つて、實に切つても切れない縁起關係を素直にしかも明了に顯はして居る。私達の世界のやうに關係を隠さねばならぬ秘密と云ふものは一つもない。皆な晴れやかな光りと、なつかしき香りとが、心行く迄發揮されて居る。

空には靜かな音樂が奏られ、ゆるやかなリズムが流れて居る。此一つ丈けでも實に肅然として襟を正したくなり、そして其間に行はれる仕事キチンと立派に果たされて居るであらう處の光景が忍ばれるやうである。そして晝夜六回花の雨が黄金の地の上に降る。然し決して濡れることはない。しかも其花は曼陀羅華と云ふ光りと香りとを以て人々を喜ばしめる白蓮華で、生活力に満みて居る花である。淨土の居住者が其花を探つて他國の人々への供養に供へる程の價値が籠められて居るのである。淨土の居住者は朝寢坊をして居ない。寶の中に包まれて居ながら皆な精勤者ばかりである。毎朝早く、今の美しき花の雨を受けて身體を清淨にし、其花を持つて十方十萬億土の佛を供養して出て行く。即ち朝食前の仕事として、全世界の人々を喜ばしめるのである。何とすばらしい超スピードの仕事ではないか。實に素敵な仕事振りである。即ち仕事の最高藝術である。何しろ仕事の第一着が全人類の爲めに捧げられるのだからスバラしい。しかもそれは朝食前の仕事である。是位愉快な、氣持のよい生活があるであらうか。積極的と云つて是位積極的なものが外にあるであらうか。

曼陀羅華、光ト香
トヲ以テ見ル人
ノ心ヲ喜バシム
ル白華、
清旦、清ラカナル
朝、
衣被、花ヲ盛ル器
食時、食事ノ時間
ノキマツテ居ル
コト、
經行、一定ノ處
ヲ往復スルコ
ト、即チ定メラ
レタル職業ト見
ルヲ得ベシ、
(本文)
彼國常有、種々奇
妙雜色之鳥、白鶴、
孔雀、鸚鵡、舍利、
迦陵頻伽、共命之
鳥、(色彩)
是諸衆鳥、晝夜六
時、出和雅音、其
音演暢、五根、五
力、七菩提分、八
聖道分、如是等法、
(鳴音)
其土衆生、聞是音
已、皆悉念佛念法
念僧(信仰心)
(中略)
彼佛國土、微風吹
動、諸寶行樹、及
寶羅網、出微妙音
譬如百千種樂、同
時俱作、(樂器及音
樂)
聞是音者、皆自然

住民の中の誰か、常番を決めてやるのではない。皆な一人残らずやるのだから素敵である。そして毎朝やるのだから素敵である。毎日毎日新しく光りと香りとに満ちて居る本當の糧を全世界に捧げに行くのである。それが物質的なものであるか、精神的なものであるかを問題にする必要はない。兎に角「過十萬億佛土」に住む人達であるからこそ、即時に十方十萬億土の佛即ち覺者達を敬ひ且つ喜ばしめ得るのである。

かくして後、還て來て御飯を頂く、そして自分達の仕事を初める。其仕事が何んな仕事であるか穿索しなくともよい。何しろリズムに充ちて居る世界であるから、キツト整然とした合理的合法的な仕事であり生活であることが想像せられるのである。

次ぎには動くものとして鳥と風とが取り上げられて居る。

先づ鳥は色彩に富んだものばかりであるが、此世のものと違つて皆な美しい優雅な聲を持つて居る。其聲は信仰に五つの根柢を與へ、五つの力を與へ、七つの覺めの道、八つの悟りの道を進ましめるものである。また風は微風であつて何とも云へない音樂を奏でて居る。之れは恰度百千種の樂器に依るオーケストラのやうで想像も及ばない微妙な音樂であるが、其樂器がまた頗るおもしろい。何ぜと云ふに、之れは極樂の風物たる樹木だからである。即ち七重の羅網を透して樹々の梢や若葉に觸れる風の音が、美妙的な音律を奏で、人々に信仰と修養の法とを感得せしめるのである。

鳥のさへずる美しい聲と風の奏でる妙なる曲とは、聞く人として自然に念佛と念法と念僧との心を起さしめて、信仰の増進へのよき手引をして呉れるのである。即ち動くものの代表として擧げられた此の二つのものでさへもが、阿彌陀佛の大悲慈を現はすものであり、淨土の風物が皆な宗教的な樂器

生、念佛念法念僧之心(信仰心)

(字解)

白鶴||鶴ノ一種

舍利||驚鷺、水鳥

迦陵頻伽||妙聲鳥

共命||一身二頭ノ鳥

和雅音||和カニミヤビヤカ、

五根||信仰ノ根、

信、精進、念、

定、惠ノ五ナリ

五力||五根ノ根ガ

ハリテ力ガ出テ

來ルコト

七菩提分||七ツノ

覺醒ニ至ル道程

擇法、精進、

輕安、喜、定、

捨、念ノ七、

聖道分||八正道ト

モ云フ、

正見、正思惟、

正語、正業、正

命、正精進、正

念、正定ノ八、

念佛||覺醒ノ根元

としてかたくるしくない豊かな感情と宗教的理論と宗教的行爲とを促して居るのだから、眼からも耳からも二重三重に私達の生活へ働きかけて呉れて居るのである。

食物に對する苦勞もいらぬ。仕事は自由に出来る。其上見るもの聞くものの凡てが、私達の向上を促がして居る。其處には一の冗物なく死物なく冗事なく死事がない。皆な生きて居るものばかりである。

無駄がない。隨て經濟的束縛がない。一切に自由であり、一切が活躍して居る。教育が徹底し、仕事を超スピードであり、生活に整然たるリズムがあつて、何等の不安もない。

今ま取出されたものは、淨土の一部分に過ぎないが、其一部分でさへこんなである。大無量壽經にはもう少し委しく出て居るが、いづれにせよ、完全な組織を持つて居ることが、是丈でさへ想像され得るのである。

然らば社會組織の中の最も中心たる其統制者と國民とは何んな状態であらうか。次ぎに之れを此經典に依て見ることにしやう。

(五) 極樂の主、それは師であり親である

淨土の主は佛である。佛なき淨土はあり得ない。しかも其佛は阿彌陀佛である。一切に自由で在り給ふ佛である。即ち阿彌陀とは一切に無量であると云ふ意味だからである。

此阿彌陀經では特に壽と光と眷屬との三無量が云はれて、阿彌陀佛の阿彌陀たる理由として居る。

ヲ念ズ
念法ニ覺醒ノ正法
ヲ念ズ
念僧ニ覺醒セル和
合團體ヲ念ズ
(本文)
舍利弗於如意阿
彌陀、彼佛何故號
彌陀、舍利弗、彼
佛光明、無量照十
方國無所障礙、是
故號爲阿彌陀
(光明無量)
彼佛壽命、及其人
民、無量無邊阿僧
祇劫、故名阿彌陀
(壽命無量、眷屬無
量)
(字解)
阿彌陀ニ阿ハ否定
語。
彌陀ハ數量ノコ
ト、即チ數量ヲ
否定スルガ故ニ
無量ト譯ス、
阿僧祇劫ニ阿僧祇
トハ無盡數ノコ
ト、
劫トハ數ヘ切レ
ヌ時間ノコト、
ソノ數ヘ切レヌ
時間ヲ一劫トシ
ソノ一劫ノ無盡
數ヲ重ネルト云
フ意ナリ、

先づ本文を讀んで見ると、

「彼佛の光明無量にして十方の國を照らすに障礙する所なし是故に號して阿彌陀とす」
「彼佛の壽命及び其人民無量無邊阿僧祇劫なり故に阿彌陀と名く」

と云つて居る。即ち光りと壽と住民とが無量だから阿彌陀と云ふのだと説明して居る。

此處に人間的な面白味があると思ふ。

一體人間と云ふものは御先眞暗なものである。普段はゑらさうな事を云つて居るが、何か大きな事
件にぶつ付かると直ぐそのゑらさがこはれて仕舞ふのである。

見得坊で強がり威張り屋で自惚で御體裁屋であるのが私達である。所が事實は何うかと云ふに、
弱虫でいぢけ屋で小膽者でへこたれ屋なのだから、まことに御話にはならない。

だから内心の前途は眞暗である。常に光明を望んで居る。享樂を追ふ心も實は光を要求する心の變
形に過ぎない。洵に憐れなものである。

此の憐れむ可き私達に對して無限の光として目前に立たれるのが阿彌陀佛である。

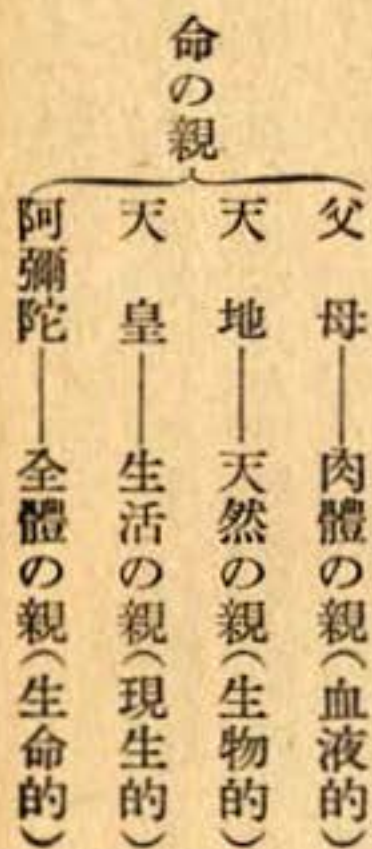
光とは智慧である。目覺である。向上である。歡喜である。

即ち光としての阿彌陀佛は私達に取つて完全な師であり、據りどころであり、規範であり、覺醒の
根源である。

また私達人間は極度に「死」を嫌ふものである。「死」の問題ぐらい嫌やなものはない。葬式をする
場所を嫌忌する氣は、持痛い處を衝かれるやうだからである。隨て當らず觸らずにして置く。そして
當面の「生」のみに眼を向けて置く。皆な生きたいのである。死にたくないのである。

(字解)
 久遠ニ均シ
 成住壞空ニ宇宙ノ
 成立ヨリ宇宙ノ
 滅亡迄ヲ四階ニ
 分ツ
 成(成立)、住(存
 在)、壞(破壊)、
 空(滅亡)、此ノ
 四ガソレソレ一
 劫ト云フ長キ時
 間ヲ要スト云フ
 劫ニ長時間ノコト
 四十里四方ノ岩
 ヲ三年ニ一度ツ
 、天人ガ羽衣
 デ摺ツテ行ク、
 ソノ岩ガ摺リ切
 レテ無クナツテ
 仕舞ツタマデノ
 時間ヲ一劫ト云
 フ。

然るに事實はのがれる事が出来ない。誠に明日をも計り難い必然的なものでさへある。
 悠久たる天地に比較して何と憐れなる一小存在ではないか。
 然し私達には大きな特権がある。即ち小に死んで大に生きる事である。かの爆弾三勇士が自ら進んで大日本帝國と云ふ大生命に生きたことも其一例である。それらは此肉體を殺すことを條件としたけれども、念佛の信仰に於ては小なる自我に死んで大なる阿彌陀に生きて行くので、與へられたる生命をして本當の正しさに生き抜かしめるものである。
 即ち阿彌陀佛は無量壽である。久遠の生命である。世界は成住壞空の四劫に依て壞滅することがあらうとも、阿彌陀佛のみは永遠に盡くることなき壽である。
 世に「命の親」と言ふ言葉がある。
 死をまぬかれる事に助力して呉れた人への感謝の氣持が、其人への永久の信仰を與へるのである。永遠の命に比ぶればホンの僅かな延命に過ぎないが、終生忘れることなく感謝が捧げられて行くのである。是れ程迄に私達は我が命を愛し、我が生を尊んで居る。して見れば「生命」の根元たる無量壽の阿彌陀佛は凡ての生物の「命の親」であるから、阿彌陀佛こそ私達の生命の最も根本的な源泉だといはねばならない。



(本文) 彼佛有無量
 (中略) 阿羅漢、非是算數
 之所能知、諸菩薩
 衆、亦復如是、
 (住民ノ二様式)
 (字解) 聲聞ニ佛ノ說法ヲ
 聞イテヨク覺ル
 人ヲ云フ、ソノ
 完成者ヲ阿羅漢
 ト云フ。
 阿羅漢ニ應供者ト
 譯ス、人々ノ供
 養ニ應ジウル資
 格者ノ意。
 菩薩ニ菩提(覺)薩
 埵(有情)人

人と云ふ字は二本の棒が互に支へ合つて出來て居るが、人間は到底一人では生活が出来ないからである。無人島に一人ボツキリで生活して居たら氣狂ひになつて仕舞ふかも知れない。せめてもの友として犬を飼つたり鳥を飼つたりして孤獨を慰めて居る。ロビンソンクルウソーの漂流記を読んだら誰でもうなづける筈である。

これ程私達は群生を要求して居る。友達が多い程よい。知己は多い程うれしい。人々は山から里へ里から町へ町から都へと集つて來る。都の中でも盛り場盛り場へと集りたがる習性を持つて居る。悪い人間が多くなるのは困るが、優秀なよい人々の殖へるのは國家進展の上に取つても誠に結構なことである。

阿彌陀佛の國の住民は無數である。即ち無量無邊であつて到底數へ切れぬ。阿僧祇劫と云ふ途方もない時間で量らなければならぬと云ふのである。

然かも其住民達は皆な善い人ばかりである。聲聞と云つて素直に阿彌陀佛の教へに従つて居る人、即ち主に忠なる善良な人のみで、しかも阿羅漢と云ふ他からの供養を受け得る資格を持つ人格者ばかりである。そしてその人達は他人の利益に奉仕せんとする菩薩でもある。

實に立派な人達丈が住んで居る。阿彌陀佛を中心として無數の善い人のみが整然として生活して居る。一人だつて無駄な人が居ない。皆な有要な人達ばかりである。

我々の世界では人間が多くなればなる程、悪い奴も出來て來る。恐らく刑務所が空つぽになる事はあるまい。人数が増せば増す程制度も複雑化し生活も繁鎖になつて來る。ところが阿彌陀佛の國は制度は非常に簡單で無駄がちつともない。一糸亂れずキチンキチンと事が運ばれて行くのである。道路

(本文)
極樂國土、衆生
者、皆是阿鞞跋致、
其中多有、一生補
處、其數甚多、非
是算數所能知之、
但祇劫說(新生者)

も建築物も修繕する必要のない程に完成されて居る。全體の空氣はリズムミカルで、仕事は超スピードである。人々には退轉がない。墮落がない。反省と覺醒とが絶え間なく行はれて居るのである。

こんな積極的な理想國家が外にあるであらうか。

楞伽經と云ふ御經には

「諸佛の淨土は阿彌陀佛の國から出て來るのである。」

と云つて居るのも無理ではない。即ち完全な國家組織を持つ阿彌陀佛の淨土が、一切の覺醒國の規範となつて居ることを云つたものである。

此の世の自由には矛盾が付きものである。

然るに阿彌陀の淨土のみは一切に自由であつて然かも矛盾と云ふことがない。

かくの如く阿彌陀佛は私達に取つて、主であり親であり師であるが、それは此經に示す三つの無量が私達に光と壽と人間制度とを開放して居るからである。

(六) 極樂への人々

素直な忠實な耳の確かな聲聞人や、すべての行爲が尊敬するに足る程立派な阿羅漢や、社會的な仕事を則明に實行して行く菩薩人や、皆な淨土の先輩達であるが、新らしく其虎へ生まれる人々も亦た實に幸福に恵まれるのである。第一、國家組織が好い。第二は周圍の人々がみんな善良である。外を見ても内を見ても全部が教育的であり、能率的であつて、よい事づくめ、よい者づくめである。

(字解)

阿鞞跋致 || 不退
轉正定聚トモ云
ヒ、正シク定マ
リテ退轉セザル
人、
一生補處 || モウ少
シデ、後繼者ト
シテノ資格ヲ持
ツ人、

だから、あとから来る人達も皆な聲聞であり、羅漢であり菩薩である。其上、「阿鞞跋致」と云ふ
退屈しない人、倦きない人、ドンドン仕事の出来る人、確信に依て心のグラツカない人である。

其上「一生補處」と云つて「阿彌陀佛」の後繼ぎになり得る有資格者が多い。即ち殆んど全部が優
秀なものばかりである。階級がない。階級觀念がない。隨て憎みや、瞋りや、愚痴がない。先輩を
先輩とし後輩を後輩とし乍ら皆な平等である。大和合である。大家庭である。そして夫等の人々の數
は無量無邊で數へる事も出来ない程の大衆である。何しろ「過十萬億土の世界」であるから、其無數
の世界から此世界に選拔せられて来る人が悉く優秀であるのも無理のない話である。しかも其選拔
は精神的方法に依て居る。即ち特別な「信仰」と云ふ選拔法を用ゐて、學問とか、智慧とか、嚴格な
規律生活とか、其他小面倒な煩鎖な條件を付して居ない。實に簡にして而かも明なるメンタルテス
トでやるのである。

私達の世界もこんな世界でありたい。實に美ましい世界である。

以上で大體極樂の組織を物語ることが出来たが、本文の切れ切れに「かくの如き功德莊嚴を彼の極
樂淨土には完成して居るのである」と斷り書きをして居る。

是に依ると「如是」と云つて其一例を取り出して居ることを表示して居るのだから、誠に面白いと
思ふ。即ち一を示して十を悟らしむる書き振りである。

私達は積極的な理想國家として、今ま此阿彌陀經に依て、極樂淨土を見ることが出来た。
然らば如何にすれば其淨土を我物とすることが出来るか。其問題に入つて行きたいものである。

編輯後記

◆別項に掲載したやうに、本會の發展は日を追ふて目覺ましく、教界未曾有の事實として各方面から凡ゆる意味で注目の的となつて來た。我々も及ばず乍ら、これ等の期待にそむかざるやう、愈々馬力をかけてゐる。

◆中村辨康師の評判の名著『信仰讀本』の改訂版も本會の手で發行され、近くは佐藤春夫氏が毎東朝に連載されて一世の好評を得た『掬水譚』も十二月上旬に出版されやうとしてゐる、小杉畫伯の装訂になる豪華版で、これなども教界としては稀に見る大出版である。

◆關西方面の講演も大成功なることは別項掲載の通りで、この方面に於ける本會の基礎もいよ／＼固くなつた譯である。

◆斯様な凡る方面の好調は、本誌に對しても一大刷新をうながすものであつて、所内を擧げて、日々喧々ゴウ／＼の議論を戦はして本誌の全面的改良、形式内容共に一流誌たる實を擧げんと着々準備を進めてゐる。來る正月號よりには必ずやこの面目一新、更に更に清新なる姿を以つて、本誌が讀者にまみゆるであらうことを編輯子は斷言しておく。

◆本月號は正月號への準備行動として、色々な計畫を持つておつたのであるが、その十分の一をも實現出来なかつた。然し、本誌の内容を御覽になつたら、我々の苦心と、一段の躍進のあとを見られるだらうと信じます。

◆讀者と本誌のいよ／＼緊密な提携こそが、發展の鍵と信じておられますから、悪いところはどしどし指摘して下さい、出来る限り讀者の意志に添ふやうに編輯し、老

若階級の差別なしに、誰れが讀んでも、これは面白かつた、爲めになつたと感ずるやうに作り上げたのです。

◆若し、本誌に良いと思ふものがあつたら、お友達、知人にも讀ませて、一人でも多く會員を作るやうに御盡力下さい。今の讀者が一人に一つの支部を持つやうになつたら、全日本の淨土化はそれ程遠い先の夢ではないのですから。

【正誤】

前號掲載、井上博士の「念佛宗は長生宗」の文中、左の通り誤植がありましたから、訂正致します。

2 頁左より二行目 組師は祖師
2 頁左より一行目 眞鸞は親鸞

4 頁右より九行目 肛の底は肚の底

4 頁右より十二行目 育は聲

4 頁左より三行目 自然は翕然

5 頁右より十行目 意織は意識

淨土 十二月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和十年十二月二十日印刷納本
昭和十年十二月一日發行

(定價金十錢)

編輯兼 佐藤 賢順
發行人 東京市本所區千歲町二ノ一八

印刷人 赤尾 光雄
東京市牛込區市ヶ谷加賀町二ノ三

印刷所 大日本印刷株式會社

發行所 法然上人續仰會

東京市芝區芝公園明照會館内
振替東京八二一八七番

「淨土」購讀規定

一部 定價 金十錢
(送料一錢)

一ヶ年 金一圓
(送料不要)

右の一ヶ年金壹圓は法然上人續仰會の會費です。入會申込みと同時に一圓御納めになれば、「淨土」及び月刊新聞「法然續仰」が一ヶ年間購讀できます。その他種々な特典が得られます。

ぜんそく苦に

専門薬 イワミドリン

奏効顯著
副作用絶無



試薬進呈 浄土讀者に限り、發賣元へハガキで御申越次第試薬（三十錢分）無代贈呈いたします。

秋から冬にかけての苦しい喘息發作の豫防と治療に、イワミドリンを推奨します。本剤は植物性有効成分を抽出合成せる専門薬で、ヒイ／＼する程の發作も服用後五分間で和ぎ、患者を安靜せしむるのみならず、漸次病根に作用して治療の目的に導き、絶對副作用なく發作を豫防いたします。その實効を先づ試薬により御實驗下さい。自信あればこそその試薬進呈です。

薬價 五十錢、一圓、二圓、三圓、五圓
十圓（有名藥店にあり）

大木五圓圖本舖
ママープラスター本舖



大木合名會社

東京市神田區鍛冶町三
振替口座東京五四〇番

中村 辨康 著（増補改訂版）

信仰讀本

定價二〇錢（送料二錢）

四六版 八〇頁

總ルビ付き

正しい信仰への手引き！それこれ程平易明快に
取扱つた物はかつて無いと云つてもよい！

この書が近來の名著として出版界の記録を破る賣行きを
示したのは決して偶然ではない。

今回法然上人鑽仰會は信仰を求めて、しかも良師を得ざるをかくつ人々に普くこの書を捧げたき念願の下に、著書に乞ふて、更に平易にし、著書の思想的擴充による補ひをもなして、こゝに増補改訂版の出版をなしたのである。雑誌「淨土」の著者の名講義の愛讀者は、これによつて更に高い信仰の段階に進まねばならない。

内 容

第一章	悟りと救ひ
第二章	宗教と人間の望み
第三章	信ずる心持
第四章	信仰の本尊
第五章	信仰を得る迄

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和十年十一月廿日印刷納本 昭和十年十二月一日發行

淨 土 第一卷 第八號

定價金十錢（送料一錢）

◇ 會 仰 鑽 人 上 然 法 ◇ 所 行 發